

SEI JU

第16卷

成喜

1991 春号



横浜 善光寺

相あい会あうなかれ

愛せざるものとも

会うなかれ

愛するものを

見ざるは苦なり

愛せざるものを

見るもまた苦なり

〈法句経〉

しょう よう

照耀 念佛

台湾を歩く



撮影 / 駒澤 晃









民國五十八年歲次己酉仲冬吉旦

南無本師釋迦牟尼佛

南





道教の本尊と神々（文武廟）











▲ 玄奘寺入口

玄奘寺本堂 ▼







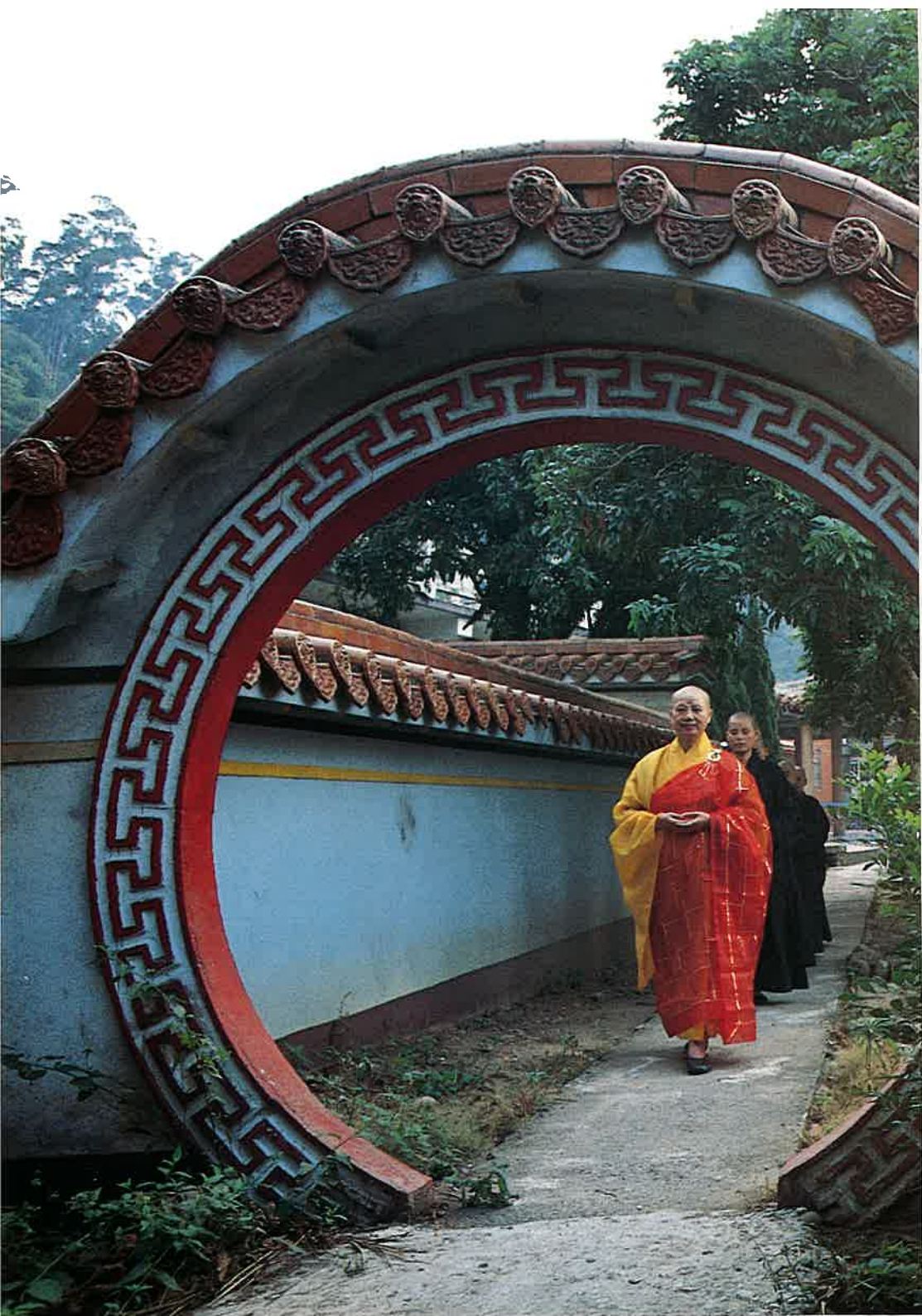
▲ 龍山寺本堂の屋根の一部 ▼





龍山寺入口 托鉢尼僧と供花売り







居芝形人指けた見で術

戲裝布 重聚



花紋

主 國

TEL 04.87316

才隆布業 04
8731633

669-6152
地址24452-1
電話3人



午後のひととき、清水岩寺境内で

カラー	● 照耀一念佛 台湾を歩く	黒田 武志	22
巻頭言	● 今、二十一世紀へ思いやりの心を	佐藤 俊明	26
特集	● 台湾仏教交流の旅	森 祖道	49
寄稿	● スリランカの仏教省と大統領の指針	矢沢 利彦	60
連載	● 喫茶閑談 パリの茶	小倉 玄照	78
カラー	● くらしの中で読む『正法眼蔵』	島 岩	85
留学記	● 台湾ふれあいの旅	阿部 慈園	91
	● 日常の日々	保坂 俊司	99
	● ベナレス素描(1)	高橋 堯英	103
	● シク教の祈り(3) 祈りの本質	沖田 玉映	107
	● インドのしごき ("Ragging")	ルース・浄信	111
	● ZENマウンテンセンター 夏安居に参じて	及川 弘美	118
	● 世界は開かれる——禅寺での一日	清水 晶子	124
	● ラーダーラマン神の一日		127
	● デリーのバス事情		130
	● 本山参拝の一日		143
カラー	● 三松閣参拝		147
善光寺だより			156
読者からのお便り			

題字・さし絵
グラビア

伊藤三喜庵
駒澤 晃

今、二十一世紀へ思いやりの心を

わが曹洞宗にとって昨年はまことに意義深い記念の年でありました。

すでに「ご承知のことと存じますが、皆様が日頃誦読しておられる『修証義』が公布になって百周年に正當いたしました。それで春以来全国各地で記念の行事が催され、十月二十七日には幕張メッセで締めくくりの記念大会が全宗門を挙げて、盛大かつ賑々しくおこなわれました。

たいへん結構なことではありますが、これは一時のお祭り騒ぎに終わらせてはならないことで、宗門人一人一人がそれぞれの立場において『修証義』の教えをいかに布教し具現するかが大きな問題であります。

そのような観点に立つて善光寺海外留学僧派遣育英会としては、この記念すべき年にあたり、日本とごく親しい身近かな国々との親善交流を深めようと、すでに前号で「報告申上げましたように、四月には韓国を訪れ、韓国仏教界の重鎮、李智冠・蔡澤洙両先生と日韓両国の留学交流について話し合つて参りました。そして十二月には台湾を訪れ、当善光

寺の末寺、箱根湯本観音福寿院の姉妹寺院、彰化県の清水岩寺に拝登、日中僧侶合同で物故者の慰霊法要をおこなうと共に、台湾大学を訪れ、哲学系教授葉阿月先生を顧問に推戴いたしました。葉先生はこの機会にと、台湾大学においての講演会を企画して私たちを待ち受けてくれましたので、参与の阿部先生が原始仏教について研究の一端を披瀝され、ついで常務理事の佐藤老師が、「修証義公布百周年に当り」と題して、今、二十一世紀に向つて、道元禅師のみ教えこそ私たちの生きる指針であることを強調し、ご自身が戦時中、中国人の示された思いやりに感動した体験談で話を結び、聴衆に多大の感銘を与えました。

台湾大学では、孫震校長（総長）はじめ、黄啓方文学院長、張永雋哲学系主任、その他の先生方がたいへん好意的に迎えてくだされ、仏法の興隆をとおして世界の平和と進展に寄与せんとする当育英会の事業に深い理解と大きな協力を約してくださいました。

どうか檀家の皆様方、この意義ある海外留学僧派遣育英会の事業推進に今後共相変らざるご支援をお願い致します。



ひとすじの太陽

赤 間 義 徳

“修証義”を指針として

海外留学僧たちが目ざす

二十一世紀の空に

公害、欲望汚染、環境破壊……

暗い雲がたれこめている。

今こそ

われら檀信徒は

毎食のひと口を献じて

方丈さまの大誓願を



あたたかく支え合おう。

宗派意識をこえ 心の国境をこえて

海外留学僧たちが

本来の仏教徒の姿となって

旅立つために。

汚れのない 生まれたての

釈尊のみ教えを

布教するために。

方丈さまの

熱い大誓願が

まだ眠っている

二十一世紀の重いまぶたを開く

ひとすじの太陽 となるために。

台湾仏教交流の旅

海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職

佐藤俊明

台北まで

空港が成田に移ってからは、羽田から海外に出ることは絶えてなかった。それが今回羽田発となったため、十何年かぶりで羽田空港の国際線出発ロビーに足を入れた。途端に「おやつ、間違えたかな」と思った。十時半を過ぎているのに、ロビーには誰もいない。店のシャッターは閉じたままである。

「いや、間違いじゃない」そう思い返した。

私の脳裡にあったのはかつての羽田国際線出発ロビーの雑踏だった。それは昔のこと、今はくらべものにはならない。国際線というものの、日本アジア航空と中華航空の数が飛んでるに過ぎないのだ。いわばローカル空港のようなもので、出発間際になれば人はやってくる。そう思って腰を据えて本を読んでいると、案の定ぼつぼつ人が入って来た。

十一時二十分に待ち合わせることになっていた。途中の交通渋滞を顧慮して私は八時四十分

に寺を出たが割に順調で二時間後には着いた。

一方、十時に出たという黒田理事長、阿部・駒澤の両参与は交通渋滞に巻き込まれ、ようやく到着したのが十二時、距離は半分でも私と同じく二時間を要している。

「はて、スムーズな旅ができるかな」とちよっぴり不安になる。

黒田理事長は「昨日の『中外』見ましたか」という。「いや、見てません。昨日はとても忙しかつたんで」というと、『中外日報』の切り抜きを出して見せてくれた。それは次のような記事である。

台湾仏教交流の旅へ

善光寺海外留学僧派遣育英会（黒田武志理事長、事務局〓横浜市港南区日野一六〇四）の黒田理事長、佐藤俊明常務理事、阿部慈園参与（東方学院講師）、駒澤晃参与（写真家）の四人は今

月十一日から十四日まで台湾訪問の旅に出発し、善光寺の姉妹寺である清水岩寺を訪問して彼我の物故者追悼法要を厳修、また十三日には台湾大学で講演するなど仏教交流を深める。

同育英会は、海外に留学僧を派遣する育英事業を継続しているほか、仏教文化圏に属するアジアや欧米の仏教流伝の地など、事業を通じて交流のある国々への視察旅行を実施し、友好を深めている。昨年はタイ、今春には韓国訪問を果たした。

一行は十二日に清水岩寺で彼我の殉難物故者追悼法要を厳修し、台湾の仏教者と交流。十三日には台湾大学で講演が予定されており、佐藤常務理事が曹洞宗の宗典である「修証義」の公布百周年に当たって、日本仏教が近代化の過程で生んだ新しい經典編纂のグローバルな意義を論じ、黒田理事長が善光寺の育英事業について紹介、阿部参与は原始仏教について講演する。

葉阿月氏を顧問に

なお、善光寺育英会は、日本の駒沢大学、東京大学大学院に留学し、中村元博士の指導を受けて博士号を取得した台湾大学教授の葉阿月氏を中村博士の推薦により同育英会顧問に推戴することを決め、今回、正式にその辞令を伝達することにしている。

一読して「こりあー、頑張らなくてはいかんなあ」と心に誓い、出国審査の第一関門に足を向けた。

中華航空のジャンボ機に乗るのはこれが二回目。十年ほど前、アメリカから帰る時乗ったのが最初だった。

「こんなおんぼろで大丈夫かしらん」と不安になったものだった。それにくらべると今回のジャンボ機はだいぶ垢抜けしている感じだ。そ

ういえば十日ほど前のNHKテレビで「ミニ・ドラゴン」と題して台湾の急速な繁栄ぶりを報じていたが、その繁栄の一端がこの飛行機にもあらわれていたというわけか。

定刻より少々遅れて二時に離陸、三時間少々フライトだが、台湾は時差一時間遅れなので四時間二十分、中正国際空港に着陸した。「中正」は蒋介石の号にちなんでつけられた名前である。

空港からホテルまで一時間かかるということだったが、ちょうどラッシュ時なので一時間半はかかった。途中洪水のようなバイクの列を幾度か見た。二人乗りが随分多い。退社時刻で家路をいそぐバイクなのである。日本の会社では退社時刻になってもすぐには仲々帰れないというのに、台湾では会社は会社、家庭は家庭とはつきり割り切って家庭サービスは決して犠牲にしないという。買物などには必ずパパが同行す

るということで、デパートは午後十時まで開かれていた。それにしても短い年月の間にこれだけの繁栄を招来しているのだから、日本人のあまりにも仕事本位の生活態度は改めなくてはならんように思う。女婿佐高信の『逆命利君』にこんな話が載っている。

逆命利君の主人公鈴木朗夫が日頃親しくしていた欧州共同体の役員に招かれて夕食を共にした。午後十時半をまわっていた頃だというのに、レストランの真向いにある日本の某大手企業のオフィスだけが、あたりのオフィスはみな退社して真っ暗なのに、煌々と明かりをつけ、かなりの数の日本人社員が忙しそうに働いているのが見えた。

それを指差しながら、その役員は言った。「われわれヨーロッパ人は一定の生活パターンを持っている。それは『市民』として果たすべ

き義務に従って構成されている。すなわち『市民』たるものは三つの義務を応分に果たさねばならない。一つは職業人として、二つは家庭人として、そして三つは地域社会と国家に、それぞれ奉仕する義務である。この三つの義務をバランスよく果たさないと、われわれは『市民』としての資格を失う。ところが真向いのオフィスで働いてるあの人たちは、どう見ても一つの義務しか果たしていないように見える。あの人たちは妻子、家庭をかえりみず、地域社会に対する義務を放棄し、仕事だけに生活を捧げているのではないか。

ヨーロッパでも、『市民』としての義務の一部を免除されている人たちがいる。軍人と警察官と囚人である。あの人たちは囚人でもなければ警察官でもないはずだ。とすれば軍人というのに最も近いのではないか。仕事のみを全生活を捧げる一種の軍人である。軍人が市民と闘った

ら、軍人が勝つことは明かだが、そんな競争はアンフェアであり、アンフェアな競争の結果としての勝敗もアンフェアだと思うがどうか」と。

われさきにと妻子の待つてゐるわが家にいそぐバイクの行列を見てしみじみと考えさせられていると、三日間の宿泊ホテル「国王大飯店」に着いた。名前がえらそうなのとは逆にまことにこじんまりしたホテルで、日本人に親しまれているというだけあって、宿泊客の多くは日本人だった。

八時に葉阿月先生が来訪されて講演会の打ち合わせをおこなう。

葉先生は、中村元先生に師事し、東京大学で学位をとられた関係上、また「私がプーナ大学で学ぶことができたのは阿部博士のおかげです」といわれるように、インドのプーナ大学でも阿部先生から受けた恩義に深く感謝している

様子で私どもの訪台を心からよろこんでくれた。

付記 阿部先生はプーナ大学で博士号を授与されている。

清水岩寺拝登

箱根湯本温泉に「箱根観音」がある。これは通称号で「福寿院」というのが正式の寺号である。この寺は今から十六年前、八十歳の老僧島倉禅龍師が建立した寺である。その頃私は鶴見の本山で出版部長だったので、島倉老僧の大誓願にもよおされた逞しい実践力と心意気を、本山機関誌『跳龍』を通して広く全国に紹介しようと思つて福寿院に拝登した。すると台湾の尼僧さん二人が見えていた。

島倉師の大学時代からの親友が台湾で長く教鞭をとっていた。そのご縁があつて島倉師は何

度も台湾に出かけ、知己が非常に多い。島倉師は、

「私には、弟子がいない。それにこのとおり
の齡だから誰か弟子を世話してくれ」
と頼んだ。すると、

「男僧はいないが尼僧ならいるだろう」
とのことで尼僧団に選考推薦を依頼してくれ
た。そして、「二人はだめだけど一人なら」とい
うことで、禅暉・禅銘の二人が選ばれた。この
二人はれっきとした寺の住職で、台湾で目覚ま
しい活躍をしているのだが、観光ビザで時折手
伝いにやってくるのであって、日本の僧籍も持
っている。そこで姉妹寺院としていっそう交流
を深めようではないかということになり、二人
の台湾の住職寺院と福寿院は姉妹寺院の縁を結
んだのである。

その一人禅暉さんは数年前他界し、禅銘さん
は台湾中部、彰化県社頭郷清水村の清水岩寺の

住職として活躍している。

さてこの島倉老僧、新寺建立について、やは
り新寺を建立した善光寺方丈の指導によりめで
たく大願を成就することができたことをよろこ
び、今後もし非とも面倒を見ていただきたいと
いうことで善光寺の末寺となったのだが、跡を
継ぐ弟子に恵まれず、もはや百歳に間近い年齢
となったので、後事の一切を善光寺方丈に托し、
台湾の姉妹寺院を是非訪ねてほしいと要請し
た。また、禅銘さんのほうからも是非来てほし
いとの声もあつたので今回拝登することになっ
た次第である。

クルマで三時間はかかるということなので、
少しでもラッシュをはずし、早く行って早く帰
ろうと、六時半に出発する。高雄まで通ずる高
速道路に入るのだが、日本での料金所はここで
は「收费站」という。名前が変わると同じよう
に変わっているのは料金を徴収するのがうら若い

女性であること。彼女らは大きなマスクをして手袋をはめている。お金を取扱うのに手袋は不便であろうと思つたが、それにはわけがあるのだという。素手だと運転手に手をにぎられるそう。してみると、大きなマスクにも排気ガスの吸引を防ぐほかに目的があるんじゃないやなからうか。

私の郷里では農家の女性が田んぼで農作業をする時、日よけ、虫よけのため、眼だけ出して顔全体を掩い隠している。これを「はんこたんな」というのだが、昔、好色の殿様がかわいい娘っ兎に手をつけたので、その魔手からののがれるために考案されたのが「はんこたんな」だという伝説があるが、収費駅の娘さんたちの大きなマスクも美貌を隠す「はんこたんな」なのかも知れない。

高速道路は日本のそれに比して少しも遜色ない。サービス・エリア（休息站）なども広々と

して感じがいい。彰化まで快適に飛ばして、このインターを降りて彰化の街はずれにさしかかった時、全く予想もしなかった思いがけない事故に見舞われた。石が飛んで来たのであろう、フロントガラスに直径四センチほどの穴があき、一瞬にしてガラスは細々になってしまった。

むかし香嚴和尚は小石が竹に当ってカチツと音を立てたのを聞いて大悟し、「一撃所知を忘ぜず、更に自ら修治せず……」と言つたが、この場合は一撃に処置を講じ、至急修理に要するわけで、バイク並みに風をもろに受けながら進むと「汽車玻璃」（汽車は自動車、玻璃はガラス）の看板を出している町工場を見つけて修理をたのんだ。こうした事故は日本では殆んど耳にしないが、阿部師の話によるとインドではよくあることだという。この国でもそうらしく、実際に手際よく事が運んで三十分ぐらいで修理は済んだ。



さて、工場に頭を突込んでいるわれらが愛車のリア・ウインドウを見ると、「南無阿弥陀仏」と書かれた紙が貼ってあった。「ああ、有難い、阿弥陀さまのおかげで助かったんだ。それにしてもフロントガラスにも貼っておけば事故がなかったかも知れないのに」などと勝手なことを言っただけで南無阿弥陀仏のステッカーのもとで写真を撮ったりした。

このアクシデントでかれこれ一時間近くを空費して十時二十分清水岩寺に着いたのだが、その熱烈歓迎に接したとき、この事故は、せっかく昼食を準備しているのだから、あまり早く到着してもらっては困る禅銘さんの願いが通じたのかも知れないとは阿部先生の言。まさにそのように思わせられる歓迎ぶり、訪問する際は、いかに交通事情とはいえこちらの都合だけではなく、相手の立場をよく考え、指定された時刻に到達するようにしなくてはと反省させられ

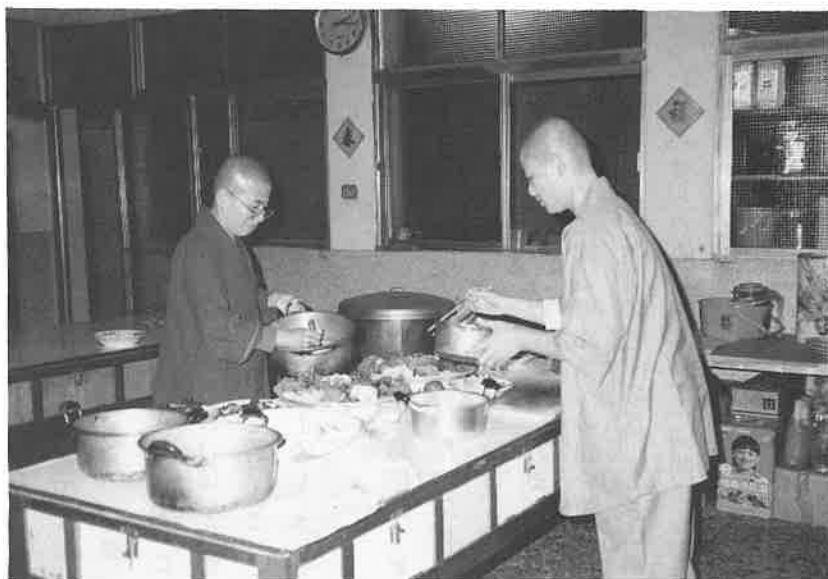
た。

「うれしくて十日前から準備してました」と
禅銘さんはいう。私とは十年ぶりの再会である。
だから歓迎の横断幕には私の住職名が「宝泉寺」
となっていた。

早速法服に着換え、日台僧侶合同で彼我の物
故者追悼法要を厳修した。禅銘さんの数名の弟
子及び信徒二十数名が参列した。

法要終つて島倉「方丈さん」のために造られ
た純日本風の建物の一室に案内され、ここで少
憩のち境内を案内してもらい、一同昼食会場
に移った。

黒田理事長が司会の労をとってくれ、私が四
人を代表して訪問の挨拶を述べたのに対し、信
徒を代表して、頼樹旺氏（元国会議員で五千人
の従業員を擁する会社社長）と禅銘さんが共々
に歓迎の言葉を述べ、手造りの精進料理で展待
してくれた。美味しい料理で楽しい語り合いの



一行のために忙しく精進料理を作る尼僧さん（清水岩寺）

ひと時を共にし、一時三十分、名残りは尽きねどお別れすることとなった。

せっかくここまで来たのだからとて、三十キロ離れた処にある名所日月潭を観光することにした。

日月潭は、台湾切つての景勝の地として国内外から多くの観光客を集めている天然湖で、海拔七五〇メートルのところにある。周囲三〇キロ、水深三〇メートル、入り組んだ細長い南西側を月、平面的な東側を日にたとえたのがその名の由来だという。

この湖の魅力は、時刻や場所、天候の加減によつてその姿と色を変えるところにあるといわれる。まことにすばらしい景観であつて、駒沢氏の美しい写真によつて想像していただきたい。

ここには孔子、関羽、岳飛とその弟子たちを祀っている「文武廟」がある。実に豪壮な建物だが、入口ではそれとは対称的に多少ユーモラ

スな二頭の赤獅子が私たちを出迎えてくれる。高さ八メートルというこの彫刻は台湾一の大きさだという。九頭の龍の彫刻もまた一見に価値するものである。

また日月潭にはかの有名な玄奘三蔵法師の靈骨を祀っている「玄奘寺」がある。玄奘三蔵の靈骨はもともと南京の天禧寺に祀られていたが、戦時中、埼玉県の慈恩寺に移され、今から四十一年前中国に返還されたものである。これもまた素晴らしい寺である。本堂の中央にある寝釈迦、金色の涅槃像はタイ風である。玄奘堂には玄奘三蔵法師の等身大のお像がある。『般若心経』を読んでいると、日本語のじょうずな老尼があらわれ、私たちを鄭重に出迎え、懇切丁寧に堂内を案内説明してくれた。

こうして思わず時間を要した観光参拝となり、途中ドライブインで夕食をとり、ホテルに帰り着いたのは九時過ぎだった。

台湾大学で講演

訪台第三日目、葉先生のはからいで十時から十二時まで講演会が準備され、九時に迎えるの車が来るといふ。

私たちは耳目をたのしませていけばいいのだが写真家の駒澤氏にはそういうわけにはいかぬ。絵になる写真を撮らなくてはならないし、撮影にはいろんな制約があるので、撮れそうな時機を逸してはならない。そこで朝食前に龍山寺に行ってみようということになり、六時四十五分に出発した。

龍山寺に着いたのはちょうど七時だった。この寺は東京でいえば浅草の観音さまのような観音信仰の寺だが、浅草の観音さまと違うところは、大勢の信者が略法衣を身につけ、鐘に合わせて「カンジンボーサー」「カンジンボーサー」と唱えながら巡堂していた。その数百数十名、

まことに壯観なもので、日本ではお授戒の際の巡堂でしかこういう光景を目にすることはできない。「カンジンボーサー」そう聞こえるが、これは「観世音菩薩」と唱えているのであろう。やがて巡堂も終り、本尊さまに向って朝のおつとめがおこなわれ、それが済んで解散となったが、駒澤氏のおかげですばらしい光景を目にすることができて有難かった。

ホテルに帰って朝食を採り、迎える車に分乗して国立台湾大学に向かう。ここは旧台北帝国大学で、現在は六学部、学生数二四、〇〇〇人という。

葉 阿月先生の室に入り、哲学系教授張先生、郭先生はじめ、大学OBの方々数名を紹介される。講演会会場は哲学系館の会議室で、会場には中高年から学生にいたるまでの多彩な顔ぶれで約七十名ほど集まっていた。

葉先生、郭先生の挨拶について、阿部先生が

「原始佛教」について研究の一端を披瀝し、次に私が「道元禅師の教え——『修証義』公布百周年に当り——」（文末の講演内容を参照）について述べ、最後に黒田理事長が善光寺海外留学僧派遣育英会について述べ、質疑応答に移り、終って黒田理事長より葉阿月先生に対し善光寺海外留学僧派遣育英会顧問の辞令が手交された。ここにはじめて、これまで未開の地であった台湾に善光寺海外留学僧派遣育英会の足がかりができたのである。

郭先生は閉会の挨拶で、「本日の催しはまことに意義深いものであった。釈尊の生誕・成道・入涅槃の時、大地が震動したといわれるが、さきほどの地震（注・私の講演中）はまさに奇瑞であって、今後日台仏教交流に新しい途が開けるであろう」と述べ、最後に黒板に、

杓底一残水（杓底の一残水）

汲流千億人（流れを汲む千億人）



台湾大学で海外留学僧派遣育英会の説明をする黒田方丈

と大書し、「皆さん、この素晴らしい道元禅師の言葉をおみやげとしてお持ち帰りください」と結ばれた。

ご承知の方もあろうが、半杓橋を渡って永平寺の境内に入ろうとするところに右のように記された石門がある。これは道元禅師が水を使われる時、必要最少限の水を器にとり、柄杓の底に残った水をもとの谷川に戻されるのであった。ある時侍者がそのわけをたずねると、「児孫に使っていただくため」と答えられたというが、この道元禅師の残された仏法の水が七五十年を経ているなお数限りない人びとの心の渇きをいやしているのである。

郭先生は先年永平寺に参拝して、この言葉に深い感銘を受けたというのであった。

閉会してのち、私たちの周囲に若い人が数人集まり、いろいろ話をかけてきた。中に日本の青年が韓国の尼僧さんを紹介してくれたが、そ

の尼僧さんは黒田理事長の前でフロアに頭をつけ三拝し、東京大学に留学したのでよろしくとのことだった。

ようやく会場を出ることができ、葉先生のセツトしてくれたレストランに向かい、昼食をいただく。張・郭両先生、ヨガ会の白林理事長、二人の研究生等が歓談を共にしてくれた。

二時大学に戻り、大鳥富太郎文庫の存否を確かめたところ、確かに存在する旨の答えがあった。目録を見せてもらったが八〇〇冊に及んでいた。ここに大鳥文庫というのは、昭和五年、大鳥富太郎男爵がその蔵書で「キリストン関係」と「日欧交通史」の世界的珍本を一誠堂書店に売り込もうとしたところ、二万円という当時としては破格の値段で書店が受け取らなかつたため知人の紹介を得て新設間もない台北帝国大学に売り込み、大学図書館に納めたというもので、今日では数億円の価値のあるものだという。

なお、大島富太郎氏の実父は江戸幕府の幕臣、陸軍奉行大島圭介氏（後、華族学校長・清国・朝鮮特命全権公使）で、元慶応大学医学部教授大島蘭三郎氏は孫にあたり、この人の知人が黒田理事長に存否の確認を頼んだもの。

二時四十分、文学院院长（文学部長）黄啓方教授に会い、三時には校長（総長）孫震先生に会った。

孫校長は、歓迎の言葉を述べ、「午前中は授業があつて残念ながら講演を聞くことができなかった」といわれ、ついで「本学で学位をとった人は一、三〇〇人もいるが葉先生は東京大学で学位をとられ、インドにも留学した稀に見る博識真摯な先生である。葉先生を通して本学との交流を深めていただければ幸いである」と、たいへん好意的な言葉を述べられたので、今後の配慮をお願いして退出した。

むすび

以上で訪台の目的は首尾よく達成したのでホッとしてホテルに戻ったが、最大のみどころ故宮博物院に足を向けるひまもない実にあわたしい旅だった。

最終日第四日目は帰国するだけの日程で九時にホテルを出た。空港に着いたが定刻間近になつても乗る飛行機が到着していない。結局一時間遅れて飛び立つことになった。

今回の旅がはじめから交通遅延に見舞われたのはどうも不思議なめぐり合わせだったが、私たちの行動はその遅延を取り戻して充分だったのでたのしい旅だった

また、帰国して間もなく正月を迎えたので、お会いした方々から年賀状をいただき、友好深厚の思いを新たにした。

〈講演〉道元禪師の教え

『修証義』公布百周年に当り

『正法眼蔵』と『修証義』

私は日本曹洞宗の僧侶ですので、開祖道元禪師のみ教えについて話をさせていただきます。

道元禪師は十三世紀初頭のお生まれで、五十四歳という短い生涯ではありましたが、日本の仏教史上、そしてまた思想上、まことに偉大な足跡を残された方であります。

日本における最大の教団、曹洞宗の開祖であると共に、不朽の名著『正法眼蔵』九十五巻をお書きになりました。

この名著は難解であるが故に、また、文字言語を軽視する禪宗の体質の故に、長い間永平寺の奥深くに秘蔵されて人目に触れることがありませんでした。四五〇年ほど経て、ようやく識者の知るところとなり、提唱されることもありました。が、広く普及するまでには至りませんでした。

十九世紀後半、日本は中央集権統一国家に生まれ変わりましたが、これを契機に、それまでいような制約を受けてきた仏教教団も宗教教団本来の姿に立ち還り、布教教化活動を展開するよ

うになり、ここに大きな転機がもたらされるのであります。

と申しますのは前にも述べましたように、禅宗には文字言語を軽視する体質があり、したがって、他の宗派のように一般大衆を説教によって教化するという布教活動はとらなかつたのであります。では宗教教団としてどういう教化形態をとったかという点、禅宗でありますから坐禅を勧めて安心立命に導くのが最高の教化活動なのですが、プロの僧侶でも実行のむずかしい坐禅を一般大衆に勧めるには自ら限界がありません。そこで「禅戒一如」の立場から、坐禅に代って、仏の戒律を授ける儀式「授戒会」が民衆教化の重要な柱となりました。それ以外の日常生活の面では、僧侶が朝夕の勤行を如法につとめ、寺院の内外を清掃し、読経回向等の儀式を厳粛莊重におこない、坐禅によって磨かれた境界を一挙手一投足に顕現して人格的に感化を与

えることであります。

それはりっぱなことでありますが、しかし、それだけでは時代の進展にこたえるには不十分でありました。ここに、信仰の指導書としての經典を編さんしなければならないという時代的要請があり、そうして生まれたのが『修証義』であります。

『修証義』は、道元禅師の主著『正法眼蔵』九十五巻の中から、比較的平易な言々句々を選び抜き、五章三十一節、三七〇四文字にまとめられたのですが、一見『正法眼蔵』そのものとまごうほど、その組織体系といい、その内容といい、まことに間然するところのない完璧なものであり、仏教各宗を通じて、これほどよくまとまった經典は他にないだろうといわれております。またその説かれているものは、曹洞宗の教儀であるといはいえ、他の宗派と仏教全体の立場にも通ずるものであります。ここに『修

証義』が宗派のいかんを問わず、多くの人びとに読誦され、親しまれているゆえんがあるのであります。

この『修証義』、公布になって今年がちょうど百周年に相当します。それで今年は各地区で、また全国的規模で記念の行事が催おされましたが、二十一世紀に向かって『修証義』の教えはいよいよ高く仰がれるのであります。

修証不二

『修証義』の「修」は修行、「証」は悟りのこととであります。禅の修行は坐禅が中心でありませんが、坐禅という悟りを開くために修するものと思う人もあるでしょうが、実はそうではないのです。もしそうだとすると、坐禅、すなわち修行は手段で、悟りは目的ということになります。たしかに常識的には修行と悟りは別物で、修行は先、悟りは後、修行の結果得られるもの

が悟りであります。これは至極もつともなことです。禅では、修行と悟りを対立させて、その間にいろいろの思慮分別をさしはさむことを「染汚」といって嫌うのです。修行と悟りを対立させて、坐禅しながら悟りを待ち望む思いがあつてはならぬ、坐つた姿がそのまま仏である、と教えるのであり、これを修証不二というのであります。

道元禅師は二十四歳の時、真実の仏法を求めて宋の国に渡りました。そして二十八歳の時に帰国し、それから十年経つた三十八歳の時、『典座教訓』といつて、禅寺において修行僧に食事を供するものの心得を述べた本を出してありますが、その中で、「わが国で仏法の名を聞くことは年すでに久しいが、僧堂（修行道場）の修行僧に供養する食べ物作法どおりつくるなどということは、先人も書かなかつたし、先徳も教えてくれなかつた」と述懐しておられるとおり、

道元禪師は宋に渡り、いろんな人との出会いに
より、典座の仕事が坐禪修行となんら変わるも
のでないことを悟るにいたるのであります。そ
してこんなエピソードを紹介しております。

青年僧道元が寧波の天童寺におつた時のこ
と、ある日昼飯の済んだあと、病氣療養中の先
輩を見舞うため、東の回廊を通つて仏殿の前ま
で来ると、背は弓のように曲り、眉は鶴のよう
に白い一人の老僧が、敷き石の上に椎茸を一つ
一つ並べて干しておりました。見れば典座の用
和尚であります。手に竹の杖をつき、暑いのに
笠もかぶらず、汗だくになつて作務（仕事）に
余念がありません。その日は非常に暑く、敷き
石は焼け切つておりました。こんな時の作務は
若い人でさえ楽しんでないのに、七十歳近い老僧と
もなるとまことに痛々しく、その姿を見て、若
き留学僧道元は用典座の側に歩み寄り、「お歳
はいくつになられましたか」とたずねたところ、

「今年、六十八歳だよ」と、作務の手をちよ
つと休めて用和尚は答えました。

「ご高齢のご老師がそんな仕事をなさらずに、
誰か若い者にやらせてはいかがですか」道元が
思いやりの言葉を述べますと、

「他は是れ吾れにあらざ」（他人のしたことは
わたしのしたことにはならぬ）

まことにきびしく鋭い一語がはね返つて来ま
した。道元はグサリと胸を刺された思いだつた
に違いありませんが、

「まことにそのとおりでございますが、今日
は格別暑い日ですし、少しお休みになられては
いかがでしょう。お体にさわるといけませんか
ら」と、いたわりの言葉をかけました。すると
用典座は毅然として、

「更にいずれの時をか待たん」（ひとたび去つ
て還らぬこの時を過ごして、またいずれの時を
待とうといわっしゃるのか）

そう答えて作務の手を休めませんでした。まさに珠玉のような言葉、一語一語にりんとしたひびきがあります。

こういわれると、もはや慰めるすべもなく、道元は黙って立ち去るのですが、「廊を歩する脚下、潜かにこの職の機要たることを覚ゆ」と述べておられますが、ここに修行の正しい在り方、真実の生き方が実によく示されているのです。

「他は是れ吾れにあらず」、これは空間的位置『ここ』を決定した言葉であり、「更にいずれの時をか待たん」、これは時間の位置『いま』を決定した言葉であります。他人でなく自分(ここ)、あとでなく(いま)、この、『いま』と『ここ』の交差した一点、これが道元禅師のいわれる「而今」であります。

今日ほど社会の進展変貌の甚だしい時代はないであります。国際情勢の動き、政治や経済の変動、技術革新による産業構造の変化、こ

うした要因によって私どもの住んでいる社会はアツという間に変ってゆくのであります。そして新興勢力の陰には常に没落の悲運に泣く多くの人々があります。したがって、世の中がいつ、どんな方向に、どんな風に変るかは何もが知りたいところであります。しかしそれは、コップを床の上に落とせば割れることはわかっているも、いくつかの破片に割れることはわからないと同様、誰にもはつきりしたことはわからないのであります。

過ぎ去った時は再び戻らず、不確かな未来は、他人と同じくあてになるものではありません。この世の中でもっとも確実なのは『いま』、この『今』の一点だけであります。この『いま』、この『今』の一点に生命を完全燃焼させることが真実最高の生き方であり、それが修証一如ということなのであります。

あてにならない未来に悟りを待ち望んで修行

したのでは「いま」の一瞬がおろそかになるのです。また、期待できない他人の力を恃んでは、「他の宝をかぞえて半銭の分なし」で、なんら得るところがありません。全エネルギーを『いま・ここ』の一点に集中し蓄積してこそ、そこに事実上真の悟りがもたらされるのであります。

以上のような、修証一如の立場で全篇が貫かれているのが『修証義』であります。

修証一如のこうした生活態度は、私どもの日常生活全般にわたって、きわめて大切なことでもあります。なぜなら、私どもの周囲には、目的のために手段を選ばない染汚の行為があまりにも多いからであります。

今、二十一世紀に思いやりの心を

目的のために手段を選ばない染汚の行為が生み出したもの、それが環境汚染、公害、自然破

壊、資源の乱開発等々の実にいまわしい問題であります。

取ってやる、奪ってやるといった態度で犯し続けて来た人間の飽くなき欲望の累積に対するむくいが今や地球の規模で人類全体の上ののしかかって来ております。

私たちは今こそここで、あまりにも現実的、欲望的人間を中心としたこれまでの生き方、世界観を深く反省し、大自然の恵みによって生かされている人間の姿に目覚めなくてはなりません。生かされている自らの姿に気付いた時、「己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さん」とする誓願がおのづから生まれるであります。そうした生き方の尊さを教える『修証義』こそは、まさに二十一世紀に向けての生きる指針を与えるものであります。

『修証義』第四章は「発願利生」（誓願をおこなって一切衆生を救うこと）を説いておりますが、

四通りの般若（智慧）として、

布施（むさぼらず、へつらわず、物でも心でも惜しみなく与える）

愛語（慈愛の心をもって、親が子に対するがごとく思いやりのあるやさしい言葉をかける）

利行（身体のおこない、口でいうこと、心に思うことの三業による善行で人々に利益を与えること）

同事（他人と心を一にして協力し合うこと）の四通りの実践項目を示しております。これはいづれも発願利生、忘己利他の思いやりを根底においたものであります。

それで、『修証義』の公布百周年に当たり、日本曹洞宗では、「今、二十一世紀へ思いやりの心を」ということをスローガンとして行動を展開しております。

この思いやりの心について、私には忘れ得な

い感動に満ちた思い出があります。

第二次大戦中、私は軍隊にとられ、中国大陸で五年を過ごしました。

一九四五年八月、終戦を迎えた時、蔣介石総統は逸早くラジオを通じ、「暴には暴をもってむくいてはならぬ。日本人をやさしくいたわってやれ」と放送されました。また、捕虜を恥辱とする日本軍将兵の心情を慮って、私どもを「捕虜」とはいわず、「日本徒手官兵」と呼んでくれました。さらに、ソ連が満州在留の日本軍人をシベリヤに連行して労役を課したのとは逆に、一日も早く日本に復員（帰還）させるよう配慮してくれました。

こうした終戦後の状況のもと、私は下士官、兵二〇〇名を引率して中国陸軍総司令部の庭の整地作業に従事することになりました。私が直接指示を仰ぐ中国側の責任者は戴という名の中佐（中校）でしたが、この方はまことに紳士的

で、私どもを全く対等に取扱ってくださいました。

労役に服して三週間が過ぎた時、突然予期もなかった復員命令、「明朝八時堯化門に集合せよ」ということが口頭で私のところにもたされました。その時は、日はすでに西に傾き、将校はみな退庁したあとでした。私は通訳の軍曹を伴って、けん命に戴中佐をさがしまわりました。ようやく戴中佐をさがしあてた私は、口頭ではあるが復員命令の伝達を受けた旨を報告しました。すると戴中佐は、

「あなた方が復員するのは個人的にはまことによろこばしいことで、私は心から祝福します。しかし、あなた方を使っている当面の責任者としての私は、証拠とするに足る成文の命令を貰わなくては許可するわけにはいきません」といわれる。

それは至極もつともなことです、私として

も千載一遇のチャンスのをがすわけにはいきません。

「わかりました。では（日本の）総軍司令部にいつてきます。ジープを貸していただけませんか」というと、戴中佐は、

「よろしい。私もいっしょにいきましょう」といつてくれ、総軍司令部で折衝の結果、なんとか復員できることになりました。

総軍の庁舎を出たのは午後九時を過ぎておりました。堯化門集合までもう十時間しかありません。フルスピードで飛ばすジープの中で戴中佐は時計を見て、

「そうだ、トラック二台貸してあげましょう」といつてくれました。私は礼を述べ、

「もう時間外ですが、城門通過できるでしょうか」といつと、

「あゝ、そう、そう。城門がねえ」といつてハンドルをきったとみるや路上に半円を描いて

反転し、中央門めざして突っ走り、城門の責任者の軍曹に私を引き合わせて了解をとってくれました。

こうしてすっかり手順をととのえ、ようやく中国陸軍総司令部に帰って参りました。戴中佐は早速トラック二台を手配してくれ、「万一の事故に備えて」といって、自動小銃を肩にした二人の下士官をつけてくれ、運転手をも集めて訓示されました。

「何回往復してもいい。徹夜になってもかまわん、荷物は全部運んでやってくれ。」

彼等はいま失意にひしがれて敗戦の祖国に帰るところなんだ。彼等自身には何の罪もない気の毒な人たちなんだ。どんなことがあってもこころよく彼等を送ってやるんだ……」

という内容の話だということを通訳から聞いた私は深い感動にむせび泣きました。

以上の話の中に道元禪師が説かれた布施・愛

語・利行・同事の四つの実践徳目がことごとく含まれているのであります。

蔣介石總統を頂点に仰ぐ戴中佐はじめ皆さんの先輩の方々のこの思いやりの心は、私にとつてどんなに有り難く、そして私をどんなに勇気付けてくれたことでありましょう。私だけではありません。日本全体がどれだけ大きな御利益を蒙ったことでありましょう。

そのことを考えたとき、今こそ二十一世紀に向かって思いやりの心を修証一如で包み、布施・愛語・利行・同事の不染汚の、汚れない実践に精進すべきことを肝に銘じ、発願利生を誓うものであります。

私の心に秘めた感動の一こまを、四十五年後の本日只今、感謝の意をこめて皆様方にお話申し上げることができましたことは私の無上のよろこびであります。

ご清聴ありがとうございました。

スリランカの仏教省と大統領の指針

森 祖道

第六回派遣留學僧
城西大学教授・東大講師
平成三年三月末まで
平成三年四月一日以降
愛知学院大学教授

はじめに

平成二年七月末より約二ヶ月の間、私はスリランカ国立ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院に、日本仏教担当の客員教授として招聘され、この国に滞在した。たゞし「招聘」と言っても、経済的に豊かな先進国の場合と違って、発展途

上国の場合は、先方が旅費・滞在費など経費一切を負担するという例は少なく（もし負担したとしても、それは彼等の基準による非常に少額なものであって、それだけでは不足である）、通常は、出講者の側の負担となる。これは、日本の様に「経済大国」と見られている国の、発展途上国に対する文化的援助の一環と理解しなけ

ればならないであろう。現にわが国の政府は、毎年、何千億円という巨額の対外援助を多くの途上国に与えているわけであつて、各国の事情に應じて、実に様々な形の経済的社会的文化的対外援助協力が継続的に実施されつゝある。例えば、青年海外協力隊の派遣などもその一例である。従つて私の場合の出講も、右の如き対外援助協力の一事例と解さなくては、世界を相手にする日本の国際活動は成立しないであろう。

とにかくそこで、右の「招聘」を受けるために、善光寺海外留学僧派遣育英会に経済的援助を申請したところ、幸いにも、本育英会黒田武志理事長をはじめ、関係者各位のご理解を賜わり、早速、第六回派遣留学僧に採用していただいた。この段、先ずもつて黒田理事長並びに係者各位に深く感謝する次第である。また本育英会に私をご推挙下さった、恩師中村 元先生（本育英会顧問・東大名誉教授）、並びに實際に

仲介の勞をとつて下さった畏友阿部慈園氏（本育英会参与・東方学院講師）にも厚く御礼申し上げる。

ところで、今回の客員教授としての任務や抱負については、既に本誌第十五号（一九九〇年秋月号）に掲載された拙論「禅の国際化と私の役割——客員教授としてスリランカ仏教徒に対する啓蒙——」に詳しく述べてあるので、この点については右の拙論に譲りたい。また右の任務を中心として、ケラニヤ大学大学院などで実際に果たした公的な業務の内容については、別途、正式の報告書を作成して理事長に提出する（これは他の多くの従来への派遣僧の報告や研究と併せて、一冊の単行本としてやがて出版されるものと聞いている）。よつて今は、私が今回のスリランカ滞在中に見聞した、この国の仏教事情の一端を述べて、本誌の紙面の一隅を汚すこととしたい。

前置きが大変長くなったが、以下、スリランカが現在、大統領以下政府を挙げて尽力している「仏教省」の創設と、これに対する大統領自身の基本方針とでも言うべき考えを紹介し、これに関する若干のコメントを試みてみたい。

仏教省の創設

日本を出発する前に、紹介して下さる人があって、駐日スリランカ大使C・マヘーンドラン氏に面会したら、大使はスリランカ仏教省(Ministry of Buddha Sasana)の事務次官D・M・P・B・ダサナヤカ氏宛の紹介状を下さった。そしてその時初めて、この国に以前にはなかった「仏教省」という役所が存在することを知って、少々驚いた。政教分離が徹底している、あるいは政教分離の主張が激しいわが国ではチヨット考えられないことだからである。そこで調べてみると、これは、平成元年一月に就任し

た現在の大統領ラナシンハ・プレマダーサ氏(氏は前任のJ・R・ジャヤワルダナ大統領の時代には、首相としてやはり政権の中枢にいた)が、同年二月に現在の内閣を発足させる時に新設した官庁である。そして仏教省の大臣には大統領自身が兼任の形で就任し、本省を直卒することとした。本省設立の法的根拠としては、後に大統領自身のスピーチを紹介する中でも触れる様に、スリランカ憲法第九条などが挙げられている。

しかし如何に仏教が重んじられ盛んな国とは言え、政府の最高の行政機関の一つに、日本ではまず考えられない様な「仏教」の名を冠した省が設けられている点に、大いに関心を寄せた私は、スリランカ到着後間もなく、紹介状を持って同省の右のダサナヤカ次官を表敬訪問した。そうしたら省内での面会の席上、次官は、近々、この仏教省の役割・使命に関する大統領

主催の会議を開催する予定なので、その会議の開会式に私も招待したいと言い、しばらく経って、実際に色刷りの立派な招待状が、車の通行証や座席指定票などと共に送付されて来た。招待状は、この国の公式の表示（例えば官庁や学校などの公共施設の表示板、バスの行き先表示、各種の公式書類など）がすべてそうである様に、シンハラ語（シンハラ文字）・タミル語（タミル文字）・英語（ローマ字）の順で、同一の内容が三回書かれていた。この様なところにも「単一民族・単一言語・単一国家」で長年生活して来たわれわれには仲々理解し難い、この国の国情の複雑さと苦心がにじみ出ているわけである。

とにかく、その招待状によれば、会議の開会式の日時は一九九〇年八月二〇日午後三時より五時まで、場所はコロンボ市内の「バンダラナイケ記念国際会議場」（こゝは比較的新しいこの国最大最高の大会議場）、当日は大統領自らが出

席されて挨拶をする予定とされていた。

仏教省の役割に関する会議

会議場付近の道路は、当日、スリランカの国旗や五戒を表わしているという五色の仏教旗などで華やかに飾られていたが、同時に参加者に対するセキュリティ・チェック（安全検査）も厳しく、あらかじめ渡されていた通行証を持たない車は会場の門の中に入れなかった。そして会場の建物の入口では、更に入場者一人一人に招待状の掲示を求め、荷物の検査をしていた。それは黄衣の比丘びくとして例外ではない様であった。現在のスリランカは、全国津々浦々（特にコロンボ市内）、この様な厳戒態勢を常時とるこ
とによって、やっと治安を維持している感がある。国内では現在、最北部のジャフナ地方でタミル人ゲリラ部隊と政府軍とが局地戦を続けており、またこれとは別に、シンハラ人の過激派

ゲリラが主として島の東北部を根拠地として、テロ活動を実行する隙を狙っているのである。従ってコロンボなどの大都市では、主要道路の角ごとに警官が二十四時間態勢で小銃や短機関銃を持って警戒に当たっており、また各役所・銀行・大学・駅・郵便局・スーパーマーケットなど、およそ不特定多数の人が出入りする場所には、必ずガードマンが配置され、厳重な荷物のチェックを実施している。その物々しさは、いささか「平和ボケ」の感のある日本人には、大変ショッキングなことであり、スリランカの厳しい現状をいやが応でも思い知らされるのである。

話は少し脱線したが、バンダラナイケ記念国際会議場のメインホールは、エアコンのきいた天井の高い大会場であり、後部の一部分だけが二階席となっている。そして同時通訳のための設備も整っていた。会場正面の一段と高い舞台



会議場内部・スピーチしているのがプレマダーサ大統領

の奥の正面には、大きな仏教旗を背景にした釈尊像が安置され、その手前、舞台の中央には、プレマダーサ大統領・ウイジェートウンが首相ら数名の政府高官が、全員白一色の在家仏教徒の服装で着席した。そしてその左右の両側には、現在この国に四つある各宗派の管長たる大長老 (Maha Nayaka Thero) が最前列に左右に二名ずつに分かれて横一列に居並び、各管長の後席には、それぞれの派の幹部長老が若干名ずつ控えていた。

一方、この雛壇と向い合う一般席の中央部の席には、多数の比丘が坐わり、それを取囲む形で前後左右の席は、国会議員席・外交官席・記者席・各界各層の招待者の席、つまり一般在家信者の席となっていた。この様にして、雛壇の上でも一般席においても、黄衣の集団と白衣の集団とは整然と分けられていた。そして二階の席は、全国各地から参集したダンマスクール(仏

教日曜学校)の大勢の生徒とその引率者たちで一杯であった。

開会式は、前に触れたダサナヤケ仏教省次官の司会で始まった。スピーチは原則としてシンハラ語でなされたが、それを解さないタミル人や外国人参会者のために、英語の同時通訳がイヤホーンを通して流された。式はスケジュール通りに進んだ。即ちまず仏教副大臣のL・ガマーゲ氏がこの会議の目的や開催の趣旨を説明し、次いで四人の管長が、順次、十五ないし二十十分ほどの間、熱意をこめて説法をした。その順序は、シヤム派マルワッタ系の管長、同じくシヤム派アスギリヤ系の管長、アマラプラ派管長、そしてラーマニヤ派管長の順であったが、これがこの国の仏教界の公けの序列となっているのであろう。因みに右に挙げたシヤム派とは、当時、大変衰微していたスリランカの仏教を再興するために、十八世紀中頃(一七五二年)に

タイより移入された一派で、今日のこの国の仏教の主流を成している。アマラプラ派とは、十九世紀の初頭（一八〇二年）に設立された一派であり、この派はビルマの系統に属する。ラーマニヤ派も同じくビルマよりもたらされた一派で、その設立は最も新しく十九世紀後半（一八六四年）のことであつた。四人の管長は、他のすべての比丘と同様に、式の進行中、常に座席に坐わつたまゝであり、拜礼する在家者に対して、合掌したり頭を下げて答礼することも一切なかつた。従つて最前列に坐つたまゝの管長に對しては、説法に際してその都度、長い柄のついたマイクが差し出された。

スピーチの内容は、四人共に大同小異であつて特に印象に残つた部分は少なかつた。それは要するに、スリランカにおいては、歴代の国王が釈尊の教説を信奉し、その教団を驚く外護して来たわけであるから、将来共に、仏の教説と

教団の護持に尽力しなくてはならない、という趣旨のものであつた。一方、次に触れる大統領のスピーチによれば、右の四人の管長の承認を得た次の五項目が、この会議の検討事項として、関係者より大統領に既に提案されていたのである。その五項目とは、(1)社会より貧困を追放すること、(2)将来の世代を保護育成すること、(3)将来の比丘を保護育成すること、(4)異民族間、異宗教間の統合、(5)すべての勢力の統合、というものであつた。そしてこの辺りに、教団がスリランカの現状に對して何を憂え何を期待しているかが窺えるわけである。

大統領のスピーチ

四人の管長の説法に次いで、最後になされたプレマダーサ大統領のスピーチは、スケジュール表では十五分間と予定されていたにもかゝらず、実際には一時間をはるかに超えるほどの

長いものであった。従つてその内容は大変盛り沢山なものであった上に、スピーチが終つた後で、シンハラ語の原文にタミル語と英語の訳文が添えられた全文が全員に配布された。であるからその内容は今改めて読み返すことが可能なわけである。そこで全部で十四頁に及ぶ英文のスピーチの要点を簡単に纏めてみると、以下の通りである。

(一) 仏教省創設の理由。スリランカ憲法第九条によれば、仏教の護持発展は政府に課せられた重大な使命であり、そのため、仏教省の新設は、国の教団並びに国内外の仏教界全体より高く評価されているものである。因みに憲法第九条とは、スリランカ共和国は、仏教に対して最高の地位を与える。従つて仏陀の教えを護持し育成することは、国家の義務である。ただし、すべての宗教に対して、第十条並びに第十四条第一項Eによつて与えられた諸権利（これは思想・良

心・宗教の自由に関する諸権利・筆者註）はこれを保障するものである。

(二) 仏滅後二三六年、デーワアーナンピヤティッサ王の時代に、スリランカに仏教が伝えられて以来、国家と仏教とは特別な関係を維持し続けて来ているわけであり、歴代の国王の中には、仏教徒ではなかった人もいたが、彼等ですら「王室の義務」として教団を外護し比丘たちに供養したのであった。スリランカ国民は、仏教の発展は国家の保護なしには達成し難いものと確信している。

(三) 釈尊の説示された、いわゆる「四聖諦」（四つの聖なる真理）は、人種・カースト・階層・言語・哲学・慣習の違いを超えて・すべての国民、すべての人間に示しうる共通普遍的真理である。四聖諦とは、(1) 苦諦（人生は畢竟苦であるという真理、括弧内は筆者註、以下同様）、(2) 集諦（苦の根本原因は人の煩惱欲望にあるとい

う真理)、(3)滅諦(煩惱欲望を滅した世界が寂靜なる涅槃の世界であるという真理)、(4)道諦(滅諦に達するための実践道の真理)。因みに右の四聖諦とは、原始聖典の各所に説かれているものであって、上座部仏教の国では釈尊の根本教説の一つとして重視されている教えである。

(四)釈尊時代のインドの有力な王国の一つであったマガダ国の、国王アジャータサットがヴァツジー族の国を滅ぼそうと計画し、その成否について釈尊に尋ねた。それに応えて釈尊が説いたのが、いわゆる「七不衰法」(国家を衰亡させないための七つの重要事項)である。大統領は、その七項の教示はそのまゝ、現在のスリランカにも適用出来るものであることを強調した。その七項とは、(1)頻繁に会合を開き定期的に協議を行うこと、(2)統制のとれた集会と勤労と解散を實行すること(つまり秩序のある社会的活動のこと)、(3)既に確立している思想信条と伝統を承

認し、施行されている法律に違反しないこと、(4)年輩者を尊崇し、彼等に従うこと、(5)道徳的精神的諸特性を護持すること、(6)自分達の禮拜の聖域を敬い、現存の宗教的儀礼を存続させること、(7)この国を訪れ、ここに居住する宗教的聖者を保護し励ますこと。

この「七不衰法」は、入滅を含めた釈尊の生涯の最後の半年ほどの生活と説法の内容を詳しくリアルに記録した經典として名高い『大般涅槃經』の冒頭の部分に述べられている。ただしその具体的表現は、大統領の右の七項の表現とは多少は微妙に相違する部分も見られる(つまり若干、現代的に解釈している点がある)が、全体の趣旨には変りはないのである。

(五)大統領のスピーチは、古代インドを初めて統一したマウリヤ帝国の英主、アシヨーク王の事蹟に数回にわたって言及している。この王は、よく知られている様に、深く仏教に歸依し、仏

教精神に基づいて国家を統治し、かつ仏教の伝道師を領国の内外に派遣して教線の拡大に尽力した。例えばスリランカに仏教が初めて伝来したのも、この王の時代のことであった。そして現在のスリランカ大統領は、このアショカ王の事蹟を範として、国の政治を實行しようとしているものと察せられる。それが右に述べた様に、このスピーチにもよく表われていると言えよう。例えばアショカ王は「正法に基づく政治」として、次の十二の徳目の実践を人民に布告したと言われている、その事例を大統領は引用しているのである。その十二とは、(1)両親に従うこと、(2)年輩者に従うこと、(3)すべての生命あるものを慈しむこと、(4)真実を語ること、(5)道徳的諸徳目を守ること、(6)友人・知己・親族・修行者・バラモンに対して親切であること、

(7)自身の浪費を抑え、最少限度のもので満足すべきである、(8)貧困者と使用人たちを柔しく遇

すること、(9)悪い行為を減少させ、善行を増大させること、(10)寛大・親切・真実・精神の浄化・柔軟さ・善意の諸徳を實踐すること、(11)粗野・残酷・怒り・高慢・嫉妬心を抑制すること、(12)現世と来世における福利を確保すること。

(六)この会議において実質的な討議は、五つの分科会に分かれて行われる。各分科会のそれぞれの討議事項は次の通りである。(1)比丘僧団・仏教諸団体・仏教省相互の関係について、(2)比丘の教育の問題、(3)仏教倫理の普及の問題、(4)法制的処置の問題、(5)青少年の仏教知識とその実践の向上の問題。

(七)仏教と民主主義の関係について。今日のスリランカでは、仏教と民主主義の間には密接な関係が存する。そしてこれに関して次の一点は明瞭である。即ち、もし民主主義が滅びても、そのことは仏教の存続の障害とはならない。この点はこの国の歴史上の数々の事例に照らして

よく解かることである。しかしながら、もし仏教が衰退し滅亡したとすれば、その時には民主主義を擁護する余地はなくなるであろう。従って民主主義を存続させるためには、仏教の永続ということが肝要であると銘記すべきである。



スリランカにて・筆者

以上が、大統領の長いスピーチの重要な諸点の概要であるが、その全体を通して顕著な特色は、スリランカの国家並びに国民と仏教ないしは仏教教団との密接不可分な関係を強調している点にある。即ち、国家及び国民は、仏教の教えと教団をどこまでも護持し発展させるべく努力すべきであり、同時に、仏教の教えは国民生活の根本指導原理でなくてはならないことが主張されている。しかもこの様な考え方は、インドやスリランカの歴史上の事例、特に仏教徒であった国王の事蹟に照らして主張されているのである。そして大統領のこの指針は、二十世紀末のわが国の現状と比べてみても、われわれ日本人には色々と考えさせられる点を含んでいると考える。しかし個々の判断や批判はすべて読者諸賢の自由に任せて、今は主としてその事実内容を紹介するに止めておくこととしたい。

ちやのみばなし
喫茶閑談——パリの茶——

矢 沢 利 彦
(埼玉大学名誉教授)

ボージョレー・ヌーヴォーのパリ

わたしたちアジアのさまざまな宗教に関心をもっている数人の者は、一九八六年以来、フランスの同志との間で『宗教とアジア社会』という名のセミナーを毎年一回東京とパリで交互に催して来た。一九八七年十二月にパリで行われた第二回日仏セミナーはたまたま主題が「仏教とアジア社会」であったところから、善光寺住職黒田武志師が参加され、日本仏教の現状を紹介

介して、聴衆に感銘を与えた。

わたしは往復の飛行機で黒田夫妻と偶然席を隣りしたのを機に親しくさせていただき、その後もずっといろいろお世話になっていた。そんなところから毎期贈っていた『成寿』を愛読しているのではあるが、まさかわたしのような仏教にはまったくの門外漢である者に、『成寿』になにか書けというような御依頼があらうとは思ってもみなかった。

一九九〇年十月三十一日、日仏セミナーの中

心的メンバーであったジャク・ジェルネ博士が来日されたのを機会にみなが集合した際、わたしは黒田師から、『成寿』に文を載せるよう求められたので、仏教とは直接関係のない雑文を書いてもいいという諒承を得たものと勝手に考えて、思いつくままに主としてパリの茶にまつわる話を書かせていただくことにする。

わたしは一九六六年に八ヶ月ほどパリに滞在したことがあるが、どちらかというと辛党であるわたしは、食事時にはもっぱら、葡萄酒を飲み、夜はコニャックを味わうという生活を取り続けたから、アルコールの入っていない飲料を飲んだという記憶がほとんどない。たしかに日本から煎茶の缶をもって行っていたものの、フランスの水で入れた日本茶はまずくてとても飲めたものではないので、一度で懲りてしまい、二度と口にしなかった。多少救いになったのは、現在日本でも流行のきざしをみせているインス

タント・ティー（パウダード・ティー）がスーパーマーケットで売られていて、大してうまくはなかったけれども、煎茶の代わりになることがわかったので、夕食まえにはそれで我慢した。大学の寮にいた関係から、茶かすを出すのは好ましくないもので、これは助かった。

フランスでは茶を飲まず店をサロン・ド・テと呼ぶことは知っていたけれども、時々街を歩いてこの看板を掲げた店を見ても、辛党のわたしには何の感興も湧かず、そそくさとそのままを通りすぎた。二度ほどガラス窓ごしになかをのぞきこんだことがある。部屋の装飾や備品、家具が王朝風のきらびやかなスタイルである上に、客はほとんどが女性で、近づき難い感じがしたことが記憶の底に残っている。

さて黒田師たちとともにパリに着いたのは一九八七年の十二月初旬のことである。わたしは成田出発前からひどい風邪をひき、声がほとんど



1987年 日仏セミナーでの一行(パリ・リヨン駅で)

ど出なかった上に、フランスの凍てつくような寒さに遭ってすっかり元気を失っていた。宿に着くと、まずしたことは通り(リヴォリ通り)に出て、スーパーマーケットで風邪薬飲み用のミネラル・ウォーター・ビンと、寝酒用のラファエル・ビンを買うことであった。茶やコーヒーは湯が必要だからホテルでは駄目である。

宿はマレ (Marais) 地区のマレ (Malher) 街にあるホテル・セヴィニエである。シングルで朝食つき一五フランという安さだ。しかし会議は同じマレ地区のパリ第一大学講堂で行われるから万事につけて便利である。黒田師たちの泊ったホテルは同じ町内にあったが、そちらの方がもう少し上等ではなかったかと思う。昼食・夕食はレストランで食べたが、一夕はジェルネ、ヴァンデルメールシュ両教授から日本側一同御招待にあずかった。あとは割勘だったはずだが、一度くらいは黒田師が自分でみなの方を払って

くださったと思う。喉を痛めてヒーヒー言っているわたしを見て、食費徴集係の同師も思わず徴集を遠慮されたのではないか。

会議は三日間に亘ってきわめて熱心に行われた。わたしは風邪薬と寄る年波のせいで途中でうっかり寝込むというような失態をやらしたが、実はこの居眠りが気付けとなって、会議の終りごろにはすっかり元気になった。講堂の廊下には五〇サンティームを投げればコーヒーが出てくる自動販売機が置いてあり、発表の合間にはわたしもせっせと飲んで眠気覚しに努めたものだ。英語にはティー・ブレイクという言葉があり、イギリス系の会議では、茶を飲む時間が設けられていて、茶のサーヴィスがあるのが普通らしいけれども、フランスにはティー・ブレイクのような言葉はないし、茶のサーヴィスもない。

さてこの第二回日仏セミナーに参加するため

にパリ滞在中、わたしはよもや翌々年に茶に関する書物を出版するようになるとは夢にも思わなかったから、食事のたびごとに尋ねられる「飲み物はなににしますか」という給仕人の問いに對しても、みなに同調して「カフェ」と答えるばかりであった。フランス人がどんな茶を飲むかについて少しも関心をもたなかった。そしてわたしをはじめ日本からの参加者をひどく喜ばせたのはボージョレー・ヌーヴォーであった。実は一九六六年の滞在の際、わたしはテール・ワインとしてボージョレーを愛用していたのだが、パリに本格的な寒さの訪れる十二月をまえに南仏からイタリアへと移動してしまつたので、ヌーヴォーを十分に味わう暇がなかった。

ところが今度は時まさに十二月初旬である。昼食の際も、夕食の際も出るのはすべてヌーヴォーばかりである。ワインについてやかましいことを言う人たちもこの時ばかりはボージョレー

に転向したのではないかと思えるほどである。外気の冷たさと合ってはじめてこのうまさが出るのであろう。おかげですっかり堪能し、パリのお茶のことはほとんど念頭に浮かんで来なかった。ただ一度だけ加藤栄一教授夫妻とルーヴル方面に散歩した時、夫人が日本への土産を買いたいと言い出したので、ルーブル美術館の東側にあるパティスリ（菓子屋）兼サロン・ド・テに寄った。パリに詳しい加藤氏の案内してくれた店だから有名な店だったに違いないが、名前は忘れた。そこでわたしが飲んだのはなんと「テ」ではなくて「カフェ」だったのである。惜しいことをしたものだといまでも思っている。でもボージョレー・ヌーボーを心ゆくまで味わえたのだからよしとしなければならぬ。

ムツシュー・テのパリ

日仏セミナー『宗教とアジア社会』第三回「儒

教」は一九八八年九月末から十月初にかけて上智大学で行われた。この回は国際セミナーと名乗り、韓国・ベトナム・中国の諸学者をも招待して、きわめて盛大な会議となり、連日活潑な討論が続けられた。会の終了後善光寺の黒田師は参加者一同を横浜本牧の三溪園に案内された上、お寺にお招き下さった。参加者はすべて宗教に大きな関心をもっているため、日本禅宗の姿を目の当たりに見ることができて大喜びであった。帰りに一同は記念として夫婦茶碗を戴いた。翌年パリのヴァンデルメールシュ教授宅をみなで訪ねたところ、同教授は一同に日本茶を振舞われた。その際使用された茶碗はなんとこの時のものであった。黒田師にはまだ報告していないけれども、同教授がこれを愛用しておられる様子がうかがえて嬉しかった。

一九八九年の日仏セミナー『宗教とアジア社会』は、「民間宗教」について同年十月初旬に八

七年と同じマレ地区のパリ第一大学講堂で行われた。今回は日本学術振興会から旅費をもらったので日程にも大分余裕があり、文書館や博物館に赴いて予備調査をすることもできた。外国人と国際会議をする時に、相手国に存在する資料、あるいは相手国人が記した資料で、その国の人^が知らないもの、あるいは重要視していない資料を上手に使って報告し、相手をびっくりさせることが成功を得る一つの方法だと思われるので、発表を行うまえに十分な日時を取れると有難いのである。

今回泊まることにしたのも前回と同じマレ街のホテル・セヴィニエである。入口に星が二つついていた。どうもフランス革命二百年、エッフェル塔百年を記念して観光客目当てにホテルの一斉値上げが実施されたものらしい。もちろん設備なども改善されたのではある^が、とくに目立つほどのことはなかった。値段の方はち

ように倍、シングルで二三フランとあがっていた。おそらく他の物価も同様の上昇率を示したことであろう。この時の円対フランの換算率は一万円が四三六フランであつて、一フランが二三円相当だったから、朝食つき一泊料金二三フラン（税込み）というのは五、三二三円という^{こと}で、日本のビジネス・ホテルなみの値段であり、われわれ貧乏書生にはまさにぴったりのである。ただこれはフランス人が儉約家である^{せい}か、トイレの引手を引いて出て来る一回の水量が足りなくて困った。詳しいことは言わない^{こと}にする^が、ツアー旅行などで高級ホテルに泊まる人には味わえない苦勞を貧乏旅行では経験するものである。

さて、いよいよムッシュ・テの話に入ることにする。実はこのパリ・セミナーへ出発するに先立ち、わたしは『東西お茶交流考』（東方書店刊）という一書を書きあげ、再校まですまし

ていたけれども、せっかくパリに行くならば、パリの喫茶事情とサロン・ド・テの写真ぐらいは載せてもらいたいと考えて、空欄をいくつつくつてもらっておいた。だからパリではもっぱらサロン・ド・テという看板を掲げた店を訪ねること、食事のあとの飲みものは一切「テ」を注文することを心掛けた。

昼食は参加者一同うちをろってマレ街とリヴオリ通りとの角かどにあるレストラン兼ブラスリー（ビヤホール）兼サロン・ド・テ兼カフェという欲ばった看板を出している店で食べた。このことは八七年に黒田師らと一緒に渡仏した時と変わらなかつた。しかし今度は一応みなのお食事が終わった際を見計らっておばさんがひとりひとりに尋ねる「ムッシュューは飲みものはなににしますか」という問いに対して、「テ」といつも答えることにした。かの女はわたしが「テ」しか飲まないのを知ってしまったので、のちには

わたしの方を向いて「あなたはテね」という意味で、「ムッシュュー、テ」と念を押すようになった。このことをあとであるジャーナリストに話したところ、わたしが茶ばかり飲むので「ムッシュュー・テ」と渾名されたというように書かれてしまった。

茶に関する書物を公けにしようとしているのだから、「ムッシュュー・テ」というニックネームをもらうことは誠に有難いことであるわけであるが、真相は残念ながら「ムッシュューはテですな」という意味であつた。しかしこの回のパリ滞在に当たっては、まさに「ムッシュュー・テ」と渾名されても不思議ではない行動をわたしはとつた。すなわち予備の研究日や、日曜日、あるいは夕食前ひとときの一時などに、「サロン・ド・テ」という看板かんばんが出ている店を片っぱしから訪ねて「テ」（紅茶）を注文しては飲んだからである。これらの店はサン・ポール教会堂のななめ前

にある前記の角の飲食店と同様に、すべてがレストランを兼ねており、本格的なサロン・ド・テとは言い難かった。この種の店は三段構えになっているのが普通で、第一段は一番外にある部分で、入口に近いところにあるカウンターと路上に置かれたパリ名物の椅子席から成っている。ここはせいぜい飲みものとサンドウィッチ、クレープなど軽食をとるところである。カウンターで立って飲めばカフェ（コーヒー）の値段も安く、大体六フランくらいであった。第二段は室内の喫茶席で少し奥に入ったところにある。ここは飲みものと軽食をとる場所である。ここだとカフェは八フランへと上昇する。第三段がレストランで、コースの食事を食べ、葡萄酒かビールを飲み、最後に飲みものをとる場所だ。カフェの値段は第二段の場合と同じである。このカフェ一杯八フランがテになるとたちまち十二フランから十四フランへとあがる。レスト



街角によく見かけるなんでもや飲食店



「マレ・プリュス」喫茶店で
テとパティストリ(ケーキ)を味わう筆者



「マレ・プリュス」喫茶店 店内

ランだから当然テーブルクロースがかかっている。

さてこのようにフランスではどうしてかカフェよりもテの方がはるかに値段が高い。しかもこの種のなんでもや飲食店で出すテはすべてティー・バックのテなのである。おそらくむかしは葉茶を使ったことであろうが、いつの間にか簡便なバックに変わってしまったらしい。どうもティー・バックで入れた茶が三百円以上するとなると日本人には高すぎるように感ぜられるのであるが、真つ白なテーブルクロスで覆ったテーブルの上でテを飲むわけであるから、これは当然なのかもしれない。同行した某大学の女性フランス語教授は、数年間に亘る滞仏中にテを飲んだことは一度もなかったということだ。それはカフェに比べてテが高すぎ、留学生にはぜいたくであったからだ。なおフランスの飲食店で提供されるティー・バックはほとんどがセ

イロン・ティーであって、フランス製とイギリス製があったが、スリランカ製のものには一度もお目にかからなかった。

「ムッシュューはテね」と注文取りのおばさんに言われるまでになったわたしが茶を飲みが一番多くでかけたのは、マレ街を真つすぐに北に向かつて歩いてフランク・ブルジョワ街を横断した左側にある、書店とサロン・ド・テを兼ねたマレ・プリユ（ス）という店である。会議場からは五分とかならないところにあり、カルナヴァレ博物館の裏側にある。この飲食部は階下のテとパティスリ（ケーキ）をとるのを主とする場所と、階上のプチ・デジュネ（朝食）やデジュネ（昼食ないしは軽食）を食べる場所に分かれているが、いずれもテーブルクロスはかけてなくて、ごく気軽な店である。階下の方はいつも女性客で賑っていた。

ここの雰囲気はなかなかいいので会議の合間

を利用してはテを飲み、パティスリを食べに通った。このテはセイロンであろうと、ダーズリンであろうと、スーチョンであろうと、すべて一五フランで、パティスリは二五フランであった。ギャルソン（給仕）の許可を得て写真を撮らせてもらった。ここまではよかった。少し調子に乗ってメニユーの写真を撮っていたところ、ギャルソンが大あわてで出て行き書籍部（出版部）のボス呼びに行つて連れて来た。どうもメニユーというものには著作権があるらしく、それを勝手に写真に撮るのは許せないというようなことであつたらしい。加藤教授に頼んで通訳してもらい、わたしが茶についての書物を書いていたので、その取材のために写真を撮っているのだから許してもらいたいと頼んだところ、出版もやっている店の主人もわかってくれ、二階のデジュネー部にも案内してくれ、その写真も撮るよう勧めてくれた。最後に自分

の店の紹介記事を入れた本が出来たら送つてくれるよう求めたので、引き受けた。

東京に戻つてから、わたしの本を出してくれる出版社の編集部と話し合ったが、写真を入れる空欄があまりにも乏しく、結局マレ・プリュ（ス）の写真は割愛せざるを得なかつた。それ以来どうも嘘をついたようで、同社の主人に合わす顔がないような気持ちがついていたのであるが、今度黒田師から原稿を頼まれた時、写真も挿入させてもらえそうなので、早速OKさせていたただいたのには、一つにこの年来の約束を果たすことができると思ったからだ。なおこの店は黒田師が先年泊られたホテルとはごく近いところにあるのだが、八七年には時間の余裕が全くなかつたので気がつかなかつた。いつか黒田夫妻とともに再訪したいと思う。イギリスではコーヒーは最初薬屋のカウンターで客に売られ、フランスでは茶は最初書店の一隅で客に

供されたという。その古い伝統をいまなお残すこの店はユニークな店であると思う。営業時間も日曜日以外は午前九時から午後十二時までというおおらかさである。この原稿が印刷になったら、その『成寿』をまず第一番にこの店の主人に送りたい。子供用の書物、パリ関係、地球・天球関係の書物を出版したり、販売したりしている書店であるから興味をもってくれるかもしれない。

なおマレ地区にはもう一軒やや本格的なサロン・ド・テであるギャルリ・グルマンという店がカルナヴァレ博物館の表門通りであるセヴィニエ街にあるけれども、ここはデジユネ(昼食・軽食)を主にしている店で、食事時間が終了すると店を閉じてしまうので、アフターヌーン・ティを飲みたいころにはいつもしまっています。残念ながらテを飲めなかった。しかし外から見たところでは、テブルクロスがかかっていたか

ら、わたしはこれを本格的だと言った訳だ。さきにも述べたが、フランスには「午後のお茶」の習慣が全体として確立しておらず、テは食事のあとで飲むものだというのが通念となっているので、イギリス人や日本人には茶の時間と思える時間にサロン・ド・テが店を閉じているという珍現象が発生するわけである。しかし四時ごろにテを飲む人も皆無ではないので、マレ・プリユ(ス)がこの時間にわりに混んでいたのである。

ヴァンデルメールシュ博士宅で夕食後の茶を御馳走になった時、パリにいま残っている典型的なサロン・ド・テはどこであろうかとお質ねしたところ、博士はリュクサンブル公園内にある茶屋がそれではないかとお答えになった。そこであすはパリを発って成田へ向かうという日の朝方、リュクサンブル公園へひとり赴いた。落ち葉が地を埋め、ジョギングの壮青年が

しきりに走る公園内で、たちまちその茶屋を見つけた。ル・シャレ・ドユ・リュクサンブール（「リュクサンブールの山荘」）というのがそれである。最近建て直されたものらしく、地下は清潔な有料トイレになっている。ただけではなく、食事もアルコール類も出す食堂で、朝の仕度^シに忙しくしているようなので、なかには入らず、屋外の椅子に坐^まってテを頼んだ。なんだかうまい。パティストリがあるからそれを食べて行け^けというようなことをしきりに言っていたようだが、朝食を食べたばかりなので断り、一四フランのテだけを飲んだ。これもティー・バックを使用していた。

ル・テ・ディザベルのパリ

わたしたちが泊った宿のあるマレ街はコンコルド広場に始まる賑やかなリヴォリ通りとこれに接続するサンタントワーヌ通りの連結点あた

りから北に走っているのであるが、あしたパリを去るといふ日の午後、バスティーユ広場に向けてサンタントワーヌ通りを散歩した。時間も時間だし、どこかでテを飲もうと考えたからである。一度バスティーユ広場に着き、新オペラ座を外から眺めたのち、広場を背に右側の歩道を引き返した。するとビラグ街という小路の奥にヴォージュ広場の建物が見えたので、この小路に折れた。すると左手にル・テ・ディザベル（「イザベルの茶」）という表示を掲げた小さな喫茶店を発見した。窓にメニューが下がつっていたが、茶、チョコレート、アイスクリームを飲ませるほか、デジュネとパティストリを食べさせるらしい。

思いきって店の中に入る。四つばかりの小テーブルがあるだけで、壁などもあまりきれいではない。もちろん外にもテーブルと椅子が出ていて、デジュネを食べたあとの食器がまだ取り

下げられていないものもあつた。店には二人の女性客があつて陽気にしゃべつていた。もうひとり赤い服を着た小柄の女性が立っていたが、これがイザベルさんであろう。さすが「お茶屋」を名乗るだけあつてテールには小さいながらすべて真つ白いクロスが掛けてある。アジア人の老人がひとりでのこのこ入りこんで行ったのを見てもだれも少しもあやしむ気配はない。

イザベルさんがメニューをもつてやつて来た。テの項には沢山の名があがつており、なかには中国のいわゆる花香茶に相当するものもあつた。テはどれでも一ポットが二〇フランで、これまでどこで飲んだものよりも高い。取りあえずリストの一番上にあるセイロンを注文する。なにかパティストリを取るのが普通らしいが、どの菓子も二五フランから三〇フランで少し高いし、これを食べると夕食がまずくなるので、一番安いチョコレートのアンソルティマン(取

合せ)というのを頼む。これは二〇フランである。女主人はしばらく入念に茶を入れていたようであつた。やがてかの女は五個のチョコレートを載せた皿と、一ポットの茶、ソーサーに載せたティー・カップ、さじを運んで来た。砂糖はテールの上に置かれた粉砂糖を使う。

女主人に写真を撮つていいかと尋ねると、いいというので、人物を撮るとあとで肖像権の問題が出るといけないからそれはやめて、店のなかの様子などを何枚か撮つた。そうしていると、さきほどからべつのテールでテを飲んでいた二人の女性のうち一人が起ちあがつてわたしのところにやつて来て、あなたのカメラであなかがテを飲んでいるところを写してあげようと言つてくれた。コンパクトカメラだから失敗することはまずないので、早速カメラをかの女に渡し、ティー・ポットを前にしていささか気どつているところを二枚とつてもらつた。あとで現

像焼付けしてみたところかなりよく写っており、昼食時に飲んだワインの影響までちゃんと出ていた。

イザベルのテはティー・バックで入れたテではなかった。女主人が棚に飾ってあるあらゆる種類の茶葉を収めた沢山のビンのなかからセylon茶の入ったビンを仕事机の上におろし、一人分の葉をビンから取り出してポットに入れ、時間を計って供してくれたものであった。これこそまさしくサロン・ド・テのテであった。パリのほかのところでは飲んだティー・バックのテに比べると雰囲気の影響もあるけれども格段のうまさがあるように感じた。

ところで、棚の上に置かれた茶葉入りのビンにはそれぞれ産地の名が書いてあるから、客はこれを見て好きな葉を注文すればいいわけである。この棚の上にはさらにべつの棚があり、そこにはやはり産地の名を記した缶が置いてあつ

た。茶葉を買って帰る客にはこの缶に入った葉を計って分けてやる仕組みのようである。実際に客の一人は何茶を買ったのかわからなかったけれども、しかるべき量を袋に入れてもらつてもち帰つた。

ひとりでテを楽しんでいると、明らかに日本人だということがわかる二人の若い女性がヴォージュ広場の方から歩いて来て、この店のまえに立ち留つた。かの女たちは窓のところにあるメニューを相談しながら孔のあくほど眺めていた。入つて来るのかなと思っていると、値段が意にそわなかつたのか、ついにあきらめてサンタントワーヌ通りの方へ去つて行つてしまつた。こういう時に気軽に話しかけられないのがわたしの大欠点で、「お入りなさい。うまいテですよ。御馳走してあげますよ」という言葉が口に出かかりながら黙つて見過ごしてしまつた。二人合わせてもせいぜい百フランぐらいの額な

のであるから、声をかけてあげればよかった。まさかこの老人がいたずらでもするために誘ったとは思わなかったであろう。テはやはり一人で飲むべきものではなく、パーティーで楽しんで飲むべきものであるから。

「ル・テ・デイザベル」ではガラスビンに入った茶葉を眼で確かめて注文できることになっているが、パティストリ（ケーキ）の方も客はみなカウンターに置いてある各種の菓子を自分の眼で見え選ぶシステムが取られている。パティストリを自ら見て注文するこのやり方はフランス全国の飲食店で共通であって、客が一番おいしそうなものを見つけて選べばいいのである。母親らしい人と一緒に店に入って来た青年も二人でさんざん相談した上で各自のものを選んだ。

店の客はだれでもトイレに入って用を足したようであるから、カフェなどと同様にパリのサ

ロン・ド・テはそういった用途でも使用されることがわかった。ことに女性にとつてはまさにレスト・ルームなのである。

合計四〇フランに五フランのチップを置いて出た。小銭はもう使えなくなるから、どんどん始末する必要があったし、この店の気分がいいのではずんだのである。

パリから東京に戻ったら、入院していた家内が重態に陥っていてびっくりした。どうもわたしがパリでひとりテを楽しんだのが悪かったのではないかといささか自責の念を感じた。家内の病状がかなり快方に向かったころ、パリのセミナーでわたしたち一同を世話してくださったアラン・フォレスト氏が来日した。

かれは図書閲覧のために駒込の「東洋文庫」にわたしを訪ねてくれた。そのときには『東西お茶交流考』がすでに上梓されていて、新聞雑誌の書評欄で取り上げられたりしていたので、



「サロ・ド・テ」の看板を出した街角の飲食店

同氏に来日記念にと一本を献上した。この書には幸にもフランス女性が撮ってくれた、例の「ル・テ・ディザベル」でテを飲んでいるわたしの写真が掲載されていた。わたしはこの写真をフォレスト氏に示し、ここはパリで出遭った唯一の本格的サロン・ド・テであると得意になって説明したところ、同氏はいささか残念そうに「こんな店は知らなかった。パリに戻ったらかならず行ってみる」と言った。かれはそのあとすぐ帰国したのだが、出版社の顧問をしている超多忙のかれのことだから、多分まだ行っていないだろう。

現在のパリの「テ」に関する話はこれで終わる。セミナーの参加者としてちゃんとした報告を行うには自分はやや歳を取りすぎた感じがする。先日（九〇年十月三十一日）黒田師も同席されて、ジェルネ博士夫妻を囲む会があった席上で、加藤教授がジェルネ夫人から「パリにま

「来たいたですか」と聞かれ、教授が言下に「行きたいと思つています」と答えたところ、ジェルネ夫人は「あなたもやはり来たいですか」とわたしに聞いた。「ウイ」と答えたものの、果たしてそれを実現できるかどうかわたしの場合はまったく雲をつかむような話である。折角二つほど気に入ったサロン・ド・テを見つけたのだから、どなたかを案内してもう一度テを味わいに行つてみたい気もするけれども、気楽な旅であるならばともかく、絶えず緊張を続けていなければならぬ旅には、果たして自分の気力や体力がもちこたえることができるかどうか疑問があるからである。

それはともかく、本誌の読者のみなさま、もしヨーロッパ旅行の途次パリに寄る機会があったら、自由時間を利用して是非わたしを御紹介したいくつかのサロン・ド・テのどれかを訪れて、パリのテを飲み、パティストリを味わつて

ください。普通のガイドブックにはない場所に行くということは旅行の楽しみを倍加させますし、深い思い出が残ります。なお念のために申しますが、フランスの飲食店では原則的にはサーヴィス料・税金込みですから、チップをやる必要はありません。わたしが「ル・テ・ディザベル」で五フランはずんだのは、さきに書きましたように小銭を消化してしまつたためと、霧囲気がとくに気に入つたからです。そういう時でも合計額の五パーセントくらいでいいとのことです。最後にマレ地区を中心とする喫茶店の案内図を載せておきます。この地区にはカルナヴァレ博物館があり、またヴォージュ広場にはヴィクトル・ユーゴ博物館もあります。地下鉄一号線のサン・ポール駅で降りればすぐです。

くらしの中で読む『正法眼蔵』

おうさくせんだば
王索仙陀婆の巻

その五

成興寺住職 小倉玄照

香巖の指導

香巖きやうげん襲燈しゆとう大師、因みに僧問ふ、

「如何なるか是れ王索仙陀婆」

巖云く、

「這辺しよへんを過ぎ来れ」

僧、過ぎ去く。巖云く、

「純置殺人」

しばらくとふ、香巖道底の「這辺を過ぎ来れ」

これ索仙陀婆なりや。試みに請ふ道へ看ん。ち

なみに僧過這辺去せる、香巖の索底なりや、香巖の奉底なりや、香巖の本期なりや。もし本期にあらずば、鈍置殺人というべからず、もし本期ならば、鈍置殺人なるべからず。香巖一期の尽力道底なりといへども、いまだ喪身失命をまぬかれず。たとへばこれ、敗軍之将さらに武勇をかたる。おほよそ説黃道黒、頂顛眼睛、おのれづから仙陀婆の索奉、審審細細なり、拈拄杖、拳拈子、たれかしらんといひぬべし。しかあれども、膠柱調絃するともがらの分上にあらず。

このともがら、膠柱調絃をしらざるがゆゑに、
分上にあらざるなり。

△現代語私訳▽

香巖襲燈大師に、あるとき、一人の僧が問うた。

「王が仙陀婆を索める、とはいつたかどうか
うことでしょうか」

香巖は言つた

「そこをちよつとよけて貰えぬか」

僧は、向うへ行つた。香巖は云つた。

「とんまなことよ、ひどいもんだ」

ひとまずみなに問うてみよう。香巖が言つた

「そこをちよつとよけて貰えぬか」というのは、

これは素仙陀婆なのか、奉仙陀婆なのか。さあ、
ちよつと答えてごらんさい。ついでに、僧が

行つてしまったのは、香巖がとめたものか、

香巖がしかけたものか、或いは香巖のもとも

のねらいであつたのだろうか。もしそれをねら

つていたのなら、とんまなことよ、ひどいもんだ、などとは言うまい。香巖の一生をかけ、全力尽して語つたものではあるが、まだ性根が坐つているとは言えない。いつてみれば、敗軍の将がこと新しく武勇を語るようなもの。そもそも、黄とか黒とか、さまざまに説いたり言つたりして来た仏祖がたは、おのずから仙陀婆をもとめたり、奉つたりで、それはまこと微にいり細にわたつている。拄杖を拈じ、扠子をあげる、そういうやり方を知らぬ者はない。しかしながら琴柱をにかわづけにして絃を調えるような融通のきかない連中の分際とは違う。この連中は、琴柱をにかわづけにして絃を調えるということがいつたどういう結果を招くかを知らないのだから、とてもその分際とは言えないのである。

概念碎き

香巖襲燈大師は、香巖智閑（？一八九八）の

こと。「百丈懷海(七四九—八一四)について出家し、のち瀋山靈祐(七七—一八五三)に参じ、結局その法を嗣ぎました。まだ瀋山から許されぬころ、南陽の武当山に入つて庵に独居していました。ある日、庭で掃除中、小石がはね飛んで竹を撃ち、その響を聞いて忽然として大悟したという話はよく知られています。

さてその香巖智閑大師に、一人の僧が「王素仙陀婆」とは何かを尋ねました。そもそも「王素仙陀婆」というのは勘の問題ですからことばでそれを説明してみてもどうなるものでもありません。

そこで香巖は、あえて概念碎きに出ます。現実生活からすっかり遊離してしまつた概念的思考に凝り固まっている僧に対しては、具体的な行動を求めることが何よりも肝腎なことです。

「そこをちよつとよけて貰えぬか」

「過這辺來」は、もつと他に訳し方があるの

かもしれない。「もつとこつちへおいで」と、増谷文雄氏は訳しています。あつちがこつちになつても、来いでも行けでも、そのあたりのニユアンスは、どつちへどう転んでも大したことはありません。要は、僧の問に対して、理づめの答はしなかつたという点に注意を払う必要があるのです。

はたして、思考と行動が分離してしまつた僧は、香巖の意表をついた答にうろたえてしまいました。考えてみれば、彼は、問を發する時点でも、自分中心の概念の世界におぼれてしまつていたのでしょう。質問の相手である香巖がその時、どんな思ひでいるかまで気配りしながら問を發するような男なら香巖も「そこをちよつとよけて貰えぬか」などとは言いますまいし、もしそう言われてもとつさにそのときどう行動すべきかは判断できたはずのものなのです。

もちろん、これは、問をしかけた一人の僧についてことを考えた場合です。

対機説法

道元禪師は、指導者側の香嚴の方にも問題があると仰せです。なぜか。実は、指導者というのは、指導を乞うている相手の人間の器量や勤の働き工合を或る程度把握しておらなければならぬのです。

仏教では、古くから「対機説法」とか「応病与薬」とかいうことを大切に考えて来ました。

「対機説法」は、教えを聞く人の能力や素質に応じて法を説くことを言います。「応病与薬」は、そのことを病に応じて薬を与えるようなものだ、と比喩的に表現したものです。もちろん、禅門でも昔からそれは当然のこととされてきました。例えば、『碧巖録』の第四則の冒頭の「垂示」には、

「青天白日、更に東を指し西を劃すべからず。時節因縁、亦須らく病に応じて薬を与ふべし。しばらく道え、放行するが好きか、把定するが好きか。云々」

とあります。まっ青な空に、太陽が輝く大空を、東の部分、西の部分とはつきり区分けすることは出来ないし、してみたところで意味もない。師家（禅の指導者）もそれと同じだということです。つまり、指導の型というものはないのであって、時により、相手によって臨機応変でなければならぬ。相手の自由に任せるか、徹底して我がままを封じ込んで管理するか、それは時に応じて師家が判断しなければならぬ——というのです。

このごろの学校教育などでは、こういう対機説法とか応病与薬とかいった考え方がどうも忘れられているのではないかという気がします。生活は便利至極になり、ものはあふれている



感じの現代は、教育にとって決していい環境ではありません。しかし、先生方もまたそういう環境の中に知らず知らずの内に浸りきってしまっているのだということをおぼえているのではないかと、気がになります。生徒が、親も親だと言っているのを聞いては、親も親だと言っているのは、教育のプロなので、グチばかり言っているのは、始まらないと私は思います。親も親だ、と思われ、家庭に育った生徒には、それ相應の確かな対応をしてやるのが教師ではありませんか。そのことがほとんど顧みられず、生徒心得に合った行動をしているかどうか、といった表面的なことのみでしか生徒を評価できない教師が多くなっているように思えてなりません。マニユアルでは、生徒の指導は出来ないはずなのです。常に生徒一人一人の個性をしっかりと把握して相手次第の対応をするのがほんとうの教

育者なのです。もし、親や家庭に問題があるのなら、親に対して的確なアドバイスを講じなければならぬのであって、「困った親だからどうにもならんよ」と嘆いているだけでは話にならないのです。

「膠柱調絃」というのは、マニユアルにのみたよってする硬直化した指導のありようを象徴しているのだと考えてよいでしょう。もし香巖のやり方がマニユアル化してしまうなら、これは危いことです。教育というのは、もともと自在なものであるはずだ、と道元禪師は仰せです。

指導者の独善性

今ひとつ香巖のやり方には問題が秘められています。指導者が陥りやすい自己中心的な独善性に関する事についてです。指導者は自らの指導の失敗については、それを謙虚に認めて反省をする度量が、いるのです。

道元禪師は、香巖の発したことを正しく受けとめられずに向うへ行つてしまつた僧について、単に僧のろまの所為とだけ片づけてしまふわけにもいくまい。ここは、指導者側の香巖にも対応の仕方がその僧に最もふさわしいものではなかつたかもしれないという反省が必要ではないのか——と言われるのです。

もちろん、教育には完璧の指導法はありません。失敗を重ねながら、指導者は力量を身につけて行くわけですが、最近の若い親御さんと関わつての印象では、どうも子育てについての親の対応の悪さを反省しようとしないう傾向が気になります。自分は、おおむね間違つたことはいないという自我肥大のきらいの強い親たちが多くなつたのです。我が子の欠陥すら素直には認められない親が多いのです。それを認めることは、自分の子育ての欠陥を認めることになるからだ、と私は思っています。

こういう自我肥大にもとづく、自分は完全無欠であるという思い込みは、学校教師には特に顕著なものではないかと私は思っています。短大を出たての若い保母さんたちが、子供に對した途端に、先生づらをして命令口調でいっぱしの口をさくのは苦々しい限りです。私はいつも彼女たちに、子供から学ぶ謙虚な姿勢がないと、一人前の保母さんとは言えませんよ、と言っているのですが、現代人がどうしてみなこういう「全能感」にばかりなるのか考えてみなければならぬ大問題だと思つています。

香巖に象徴されている禪の指導者も、そういう完全人間になつてしまひやすい傾向があるから充分注意しろ、というのが道元禪師のご注意なのでしよう。もちろん、完全人間になつてしまえば、勤もにぶつてしまふのは、これは当然なことです。

「台湾ふれあいの旅」

歓迎の横断幕 清水岩寺



撮影／駒澤 晃



世界平和に貢献した人々の供養 清水岩寺

①
②





昼食をいただく



久しぶりの再会を喜ぶ



台湾大学での講演 佐藤俊明老師



台湾大学での講演 阿部慈園先生



葉阿月先生に善光寺資英会顧問辞令伝達をする方丈



台湾大学校長 孫震氏と会談



インド留学記

その5

日常の日々



愛知学院大学
助教 授岩
島 岩

語学コンプレックスから立ち直る方法

プーナについてから三ヶ月ほど悩まされたのが、語学コンプレックスであった。授業にでてもなんのことだか分からないし、寮に帰ってもまわりの寮生たちと充分コミュニケーションできない状態が続いた。

授業では、サンスクリット（梵語）のテキストが英語に訳され説明されるのであるが、その

英語がよくフォローできなかった。さらに、サンスクリット語はインドの学生たちにとっては日本での古文のようなもので、彼等は予習もろくすっぽしていないのに授業についていけるように思えた。私のように二、三行読むのに辞書を何度もひかなければならないのは格段に実力が違っていた。それに度胆を抜かれたのは、もういまだき話す人などいない古典語だと思っていたサンスクリット語で、授業が行われていたことだ。先生がサンスクリット語でしゃ

べっているのを、インド人学生たちはサラサラとノートしていた。これを見て、私は絶望的な気持ちにとらわれた。

サンスクリット語の能力について差があるのは仕方がないのだが、英語力にも大差があったのはショックだった。特にコミュニケーションの手段としての英語力という点では。インド人の学生のなかには、小学校から英語で教育の行われる学校に行っていたやつらがいる。その人たちは、小学校の高学年くらいには英字新聞を読んで、「今日のクリケットの試合の結果は」なんてやっていただけのだから、中学から英語を始めた私かなわないのしょうがない。だが、私と同じように中学校から英語を始めて、大学卒業まで一〇年間学んだだけのインド人にもかなわない。圧倒的にむこうの方がしゃべれるのだ。こちらが大平さんのように「アー、ウー」と言っているまに、四・五倍はしゃべりまくられる。

これにはさすがにまいった。自分の英語力に自信をなくし、どんどん語学コンプレックスに陥っていった。そして「どうして、私の英語はこうも使いものにならないのだろう」と思い悩むようになった。そこでこのコンプレックスから立ち直るために、次のようなことを考えて居直ることにした。

(一) インドの英語教育は、日本とは異なり、英語を英語で教えるというダイレクト・メソッド(直接的方法)をとっている。一方、日本の英語教育は、英語を日本語で教えるというインダイレクト・メソッド(間接的方法)をとっている。これが、同じ期間英語教育をうけながら、英語の運用能力の差となってあらわれてくるのだ。これまで私が英語を習った先生たちは、果たして自由に英語でしゃべったり書いたりできただろうか。そうは思えない。とすれば、そんな先生から英語を習った私が英語がしゃべれない

いのは当然のことなのだ。

(二) インドは多言語・多民族国家であり、一つの国のなかにいろいろな言葉を話す人々が住んでいる。北インドの人と南インドの人が出会ったとき、互いの母国語が異なれば英語でコミュニケーションするということになる。そんなふうにはインド人は、英語を日常生活のなかで使う機会が多いのだ。だが、日本では事情は異なる。日本は一応単一言語の国だということになっている。日本人どうしが、方言の違いはあるにしても、言葉が通じなくて、英語で話す必要に迫られるということなどありえない。従って、日本人は英語が喋れないのだ。だが、これはこれで、自分の国で外国語を使う必要がないのだから、逆に言えばインドより幸せな状態なのだ。

(三) イスラム圏およびインド圏は、中国文
化圏とは異なり、「自己主張の美德」の必要なく
ころである。日常の買い物ひとつとっても、定

価などなく交渉で値段がきまるようなところで、絶えず自己主張していないとだまされて損をしかねない。それにたいして、日本は、「出る釘は打たれる」とか「実るほど頭のたれる稲穂かな」なんて諺があるように、自己主張はあまり評価されない。むしろ伝統的には、「沈黙と謙讓の美德」の文化圏である。従って、自己主張・自己表現がどうしても下手になる。それが外国語になると、ますます自己主張・自己表現ができなくなるのだ。これは文化の違いであり、個人の責任ではない。

このように考えて、私はようやく語学コンプレックスから立ち直ったのであった。三ヶ月かかった。しかし、こう居直つてみると、心理的なコンプレックスがなくなり、不思議と英語が口から出てくるようになってきた。ようやく、日常生活にも授業にもそう差し障りがなくなってきたのである。

大学での授業

プーナ大学で私が所属した「サンスクリット・プラークリット語学科」(Department of Sanskrit and Prakrit Language) 及び「サンスクリット高等研究所」(Centre of Advanced

Study in Sanskrit 略称 CASS) も併設されており、サンスクリット文学の大家ジョシ先生 (Prof.S.D.Joshi) が学科長と研究所長を兼任していた。日本の国立大学の講座制度では一つの研究室(すなわち講座)に教授と助教授(あるいは講師)と助手がいるのが普通で、講座はたくさんあるから当然教授もたくさんいるわけだが、プーナ大学では教授のポストは「サンスクリット・プラークリット語学科」と「サンスクリット高等研究所」に各一つ、教授(Professor)といえはそれぞれ学科長、研究所長に相当し、日本の教授に比べると相当権威があるよう

に思えた。そして、このジョシ教授のもとに、五人の助教授 (Reader) と二人の講師 (Lecturer) と二人の研究員 (Senior Fellow) という総勢二〇人のスタッフがおり、それぞれ研究と教育に従事していた。

プーナ大学は大学院大学なので、学生は修士課程と博士課程の学生だけで、学生たちはそれぞれインド各地で学部(いわゆる四年制の大学)を卒業したのちこの大学院大学に入学してくる。このように様々な地方の学生がおり、インドは、地方によって言葉が異なる多言語国家(たとえばお札にもヒンディー語・マラーティー語・タミル語・ベンガル語・英語などの一五の言葉で一〇ルピー等の額面が記入されている)なので、母語の異なる者たちからなる学科内の共通語は英語であった。すなわち、授業や会議はすべて英語で行われるのである。これは外国人である私にとっては好都合な状況ではあった



が、一方、日本人同士では日本語があたりまえの国日本から来た私には、「どうしてインド人同士が英語でコミュニケーションしなければいけないんだろう、どうしてインドの言葉たとえばヒンディー語にしないのだろう」という奇異な感じ

が最後まで抜けなかった。

博士課程の学生たちはそれぞれの指導教官について博士論文を書くのが仕事なので、授業にでるなどということはない。授業があるのは修士課程の学生だけである。この修士の授業は次の

四つのクラスに分かれていた。(一)梵我一如(大宇宙と小宇宙の同一性)を説いた伝統的なインドの哲学ヴェーダーンタを学習するヴェーダーンタ・クラス、(二)インド最古の宗教文献ヴェーダを学習するヴェーダ・クラス、(三)サンスキリットの文法学を学習するヴァーカラナ・クラス、(四)インドの論理学を学習するニヤヤー・クラスである。各クラス二科目からなり一科目は週に二コマ(一コマ五〇分)である。従って学生たちは、自分が四つのクラスのうちから選んだ一つの主要なクラスから二科目週四コマの授業に出席し、さらに他の三クラスのうちから三科目週六コマ、合計週一〇コマ程度の授業に出席するのである。

私は特別研究生という形で一年間だけの学生だったので、二年間で修了する修士の学位を得る必要も可能性もなかった。そのため、授業の単位とはとりあえず無関係に、出たい授業

に出ればよかった。それで、大宇宙と小宇宙の同一性という神秘的な思想にそのころシビレていた私は、ヴェーダーンタ・クラスにだけ出席することにした。そこで行われていた授業は、『ガウダパーダ頌』(ヴェーダーンタ学派に属する作品で六四〇〜六九〇年ころの人ガウダパーダによって編纂された。仏教の影響が比較的強い作品である)週二時間と『サーンキヤ・タットヴァ・カウムデー』(純粹精神と物質の二元論を説いたサーンキヤ学派に属する作品で『サーンキヤ頌』にたいするヴァーチャスパティミシュラ(八九〇〜九八四年ころ)の注釈)週二時間であった。両方とも学生がテキストの予習してきて先生に誤りを直してもらおうという日本のような演習形式ではなく、先生がテキストを読んで一方的に説明していくという講読形式であった。そして、その授業の様子はこんな風だった。

授業風景

日本の大学では一コマが九〇分と長いので、筒井康隆の『文学部唯野教授』の世界のように、先生は一〇分は遅れてくるものと相場が決まっていたが、インドでは一コマが五〇分と短いので、先生はほぼ授業開始のチャイムとともに教室にやってきた。そしてすぐにテキストを読み始めるのだ。

学生たちは予習などとしてきている様子はない。テキストと白紙のノートだけもってきて、フンフンと言いながらなにかノートをとっている。出席している学生数は一〇人程度で、そのうちの半数以上は女子学生だ。となりの女子学生のノートをこっそりのぞいてみる。先生の説明は英語なので、当然英語でノートをとっているのかと思ったがそうではない。隣の娘はマハーラーシュトラ出身なので、母語のマラーテ

イー語でノートをとっていた。僕も日本語でノートをとることにしようかとも思ったが、「英語での授業は英語でノートをとるのが筋だ」と考え直して、あくまで英語にすることにする。しかし、残念ながらもまだ英語では授業のスピードについていけない。相当ノートし損なった箇所が残る。この欠落部を寮に帰ってから再度テキストを読み直しながら埋めていかなければならないのだ。

私のほうは二クラス週四コマの授業にでるだけでもこんなに難行苦行なのに、インド人の学生のほうは、週に五クラス一〇コマ以上の授業をろくに予習復習もせずにこなしていく。一体この差はなんなのだろう。そしてこんなことを考えた。

サンスクリット語（梵語）とインドの現地語（たとえばプーナ市があるマハーラーシュトラ州のマラーティー語）はよく似ている。第一文

字が同じではないか。インド人がサンスクリット語のテキストを読むのは、日本人が『源氏物語』や『枕草子』といった古典を読むようなものなのだろう。たとえ日本人が古文を読むほどインド人にとってサンスクリット語は簡単でないにしても、せいぜい日本人が漢文を読むくらいの困難さしかないのだろう。とすれば、プーナ大学のサンスクリット学科は日本でいえば国文科あたりに相当するわけだ。そう考えるといろいろ符号するところがある。まず、どうしてこの学科には女子学生が多いのかがよく分かる。日本の国文科と同じなのだ（あえてその理由は述べない）。また、インドにおけるサンスクリット教育のたどった道は、日本における古文や漢文の教育のたどった道とよく似ている。第二次世界大戦以前に教育を受けた日本人は、別に夏目漱石や森鷗外にまでさかのぼらなくても、古文や漢文の素養があった。李白だ杜甫だ

白楽天だとか『古今和歌集』の歌だとか、それなりに身につけていた（ように私には思える）。そのせいで日本語がうまかった。表現の様々なヴァリエーションを知っていたし、また使うことができた。でも私の世代（戦後世代）はだめだ。言葉はいいたいことを伝えることさえできればいいのだ、それもできるだけ平明な表現で伝えればいいのだという、いわゆる「つづりかた教室」時代の子供たちなのである。だから日本語ができない。このことは、英語の作品やサンスクリット語の作品を翻訳しているときに、しみじみというかくやしなからというか身にしみる。原語を読んで分かったことが、日本語にすると言葉足らずでズレてしまうというくやしさを味わうのだ。その原因は戦後の古典・漢文教育の衰退のせいだ、というのが私の見解だが、それと同じことが次に述べるようにインドでも起こっていたのである。

（つづく）

インド留学記

その11

ベナレス素描(1)



東方学院講師
駒女短大講師
阿部 慈 園

1

「ベナレス」は、じつはイギリス人がいいや
すいようにつけた呼び名で、現在インドでの正
式名称は「ヴァーラーナシー」です。パーリ語
で書かれた原始仏教聖典には、この「ヴァーラ
ーナシー」の語がよくあらわれます。したがっ
て、古名に復帰したということができましよう。
しかしここでは、「ベナレス」という呼称で一般

によく知られていますので、この語を用いるこ
とにしましょう。

ベナレスへはじつによく足を運びました。留
学中から現在まで十回は行ったかもしれませ
ん。家内とスリナガルに遊んだかえりにも、ベ
ナレスに寄りました。五月の初めてでしたから、
猛暑のまっさかりで、「熱い、熱い」と苦言を呈
されたことを覚えています。おまけに、ホテル
の部屋のクーラーが故障していましたからなお

さらでした。夕方の涼しくなったころを見はからって、ガンジス河の岸边に案内しました。川面をわたってくる涼風にほほをなでられ、また黄金色に輝く落日の神秘さに魅せられたかの女は、少しくご機嫌きげんを直したようでした。

2

ベナレスにはインドのこころのようなものがあることは確かです。多くのインド人は、ベナレスに来て、ここで最期の息を引きとり、荼毘だびにふされて、昇天したいという願望をもつています。

外国人のわたしにすら、「また行きたいな」と思わせるなつかしさをこのベナレスはもっています。あたかも、都会に出た者が、生まれ故郷を思うような、子がいくつになっても母を慕うような、そんな思いがガンジス河の岸边に立たせるのかもしれない。

雨季にはあたり一面を水びたしにするガンジス河も、その乾季には水量を減ずるとはいえ、ゆたかにたおやかに流れています。小舟が此岸から対岸へ人を運び、また戻ってきます。河の水の色はあくまでも深い青緑です。

留学中、一月におとずれた時でした。寒いのに腰巻ひとつのヒンドゥー教徒たちが沐浴行をしていました。鼻を指でおさえて、頭もろとも水中にもぐります。浮きあがってはまたドブン。それを何回も繰り返します。女性はサリーのままです。釈尊の時代から、かれらは、沐浴によって心身の罪垢が清められるとかく信じているのです。

3

ベナレスの町の様子を、留学中の日記（昭和五〇年一月三日付）から引用して、素描することにしましょう。

「ここベナレスもやはり、イギリス軍の駐留地（キャントンメン）があったと聞くが、プーナほどそのあとかたはなく、古き良きインドのおもかげを伝えている。プーナに比べて、よりインド的であり、西欧くさくない。路地は実に狭い。ちまたには野菜売りや果物売りが、地べたにむしろを広げている。あげものが、軒先にあぶらなべを出している。男が、顔にヒゲをのばした、いいオヤジが、ミシンのペダルをふんでいる。日本ならば、娘さんか母親がミシンをあてるのに、偉丈夫が真剣な顔をして、ミシンを動かしている。おもしろいと思った。

町では、昼間でも女性の姿を見かけるのはまれだ。むくつき男どもがちまたにあふれている。そのほとんども、日がな一日何もすることなく、道行く人々をじっと見つめている。特に、われわれ外国人が通りかかると、



黒い大きな瞳をまばたきもせず、強い視線を向ける。こつちも負けじと、目をそらさない。買い物は男がする。プーナでも同様だ。女の人は、家の中にいて家事と育児とにいそしむ。陽だまりで、母親が赤子に乳房をふくませている光景は、ほほえましい。

町では、リキシヤを主に使った。本当は歩きながら、立ちどまりながら、ゆつくり見たいとは思ふものの、せいている旅でもあり、また持物をひったくられる恐れもあるので、リキシヤの上からベナレスの町を見た。

ベナレス・ヒンドウー大学に留学している京大大学院の茂木秀淳氏（現在信州大学助教）は、

『ベナレスはバラモンが多く、彼らは全く無為徒食の徒で、いばっているだけで能がない。日なかねころんで、本ばかり読んでいて』と語ってくれた。

釈尊は、あえてこのバラモンのちまたに身を投じられ、自らの悟られた所を理解せしめようとされた。この路を、この通りを釈尊が歩かれたのか。この露地に、この石の上に腰を下ろされたのか。この河を、数人の弟子たちとともに渡られたのか。そう考えただけで胸ふくるる思いがした。黄金色に輝くガンガ―の落日を見ながら」

そのとき、こんな句を拾った。

ベナレスの この路をこの河を 釈尊が
そして、それから釈尊への想いは次第に増幅され、釈尊はいかなる着衣をされていたのか、どんなものを食べておられたのか、またどんな所に住んでおられたのか、そんな想いがしきりに頭をよぎるようになった。

(つづく)

インド留学記

その9

シク教の祈り(3) 祈りの本質



会員 司
研究 俊
研 研
方 任 坂
東 専
保

前回まで、ヒンドゥー教とイスラーム教の祈りの形式について比較検討しました。しかし、このような形式的な比較が宗教的な祈りの本質を知るのにどれほど意味があるか、と思われた方も多かったのではないのでしょうか。

たしかに、これまで試みてきた形式的な比較というものは、それだけでは単なる知識の遊び的な次元に止まるものです。しかし、このような比較は宗教というものの存在が多岐に亘っている以上、基本的理解のためには不可欠でもあ

ります。と同時に、それだけでは真に宗教的な意味での祈りを理解すること、少なくともシク教の祈りを理解するには十分ではありません。というのも、祈りというものは宗教的な形式であると同時に、内面的で、精神的な行為でもあるからです。つまり、極めて個人的な感情の世界の中に見え隠れする祈りの本質というものは、本来他人や他者の介入を許さない個人的な閉ざされた世界に根ざす部分が多いからです。

一般に祈りとは、個人と神（超越者あるいは

超越的存在)との何らかの交流を意味しています。『哲学事典』によれば「神へ心をむけ高揚する一切のことを意味している。あるいは総じて神との人格的交流と考えられる」ということとなります。そして、この神との交流がすでに述べたようにヒンドゥー教では極めて呪術的であり、人間主体の信仰形体となり、一方、イスラーム教はといえば、神中心の信仰形体をとるということとなります。では他に、神と人間との関係はありえないのでしょうか。つまり、人間と神との関係において、どちらにも偏らない関係です。あるいは言葉を替えれば、神と人間が相即不二の関係となるということです。具体的に言いますと、人間が神と一体化する関係ということです。

超越的存在である神とその被造物である人間とが一体となるという考え方は、一般的には神秘主義思想と呼ばれています。この考え方につ

いての詳しいことはいずれ紹介しますが、この神秘主義思想が祈りということの本質を最も典型的に表しておりますので紹介したいと思います。

超越者(神)と人間との合一

この神と人間が一体化するという考え方は、インドの精神伝統の中に存在しましたから呪術的傾向の強いヒンドゥー教の中でも、独特の発展をしていました。特に、中世インドではバクティと呼ばれるヒンドゥー神秘主義思想とその信仰形態が広く普及していました。ところが、絶対的超越的神の存在中心に置くイスラーム教ではそう簡単に話は運びません。なぜなら「絶対的超越者である神と、その被造物にすぎない人間とがどうして融合・あるいは合一できるのか」という、深刻な神学上の問題が、イスラーム教にはあるからです。それは、イスラーム教

では神を余りに高く、しかも絶対的な存在とみなしているからです。しかし、この観点に立ちますと、神が民衆から離れすぎてしまい、神の存在が民衆にとっては希薄なものとなってしまいがちです。勿論「それだからこそ神なのだ」と納得できる人も多かったのですが、そうでな

い人も沢山いました。そのような傾向は、元来神秘的な思想を好む傾向があったペルシヤ人に多く出現しました。ペルシヤを中心に出現した一連の民衆思想家が、この難問題解決に宗教的情熱の全てを傾けました。これが世に言うイスラーム神秘主義者スーヒーとその思想です。実



はこのイスラーム神秘主義思想家スーヒーの存在こそ、最も典型的な祈りの形態なのです。それは、ヒンドゥー系の諸宗教のように呪術的な要素を殆ど持っていないためです。その意味は、すでに紹介したとおりです。

このスーヒー達の祈りに対する純粹で真剣姿勢が、本来極めて宗教的なインドの人々の心を大いに動かしました。8世紀以来、インドは徐々にイスラーム化してゆきますが、その殆どは、スーヒー達の宗教性の高さに感動した人々の自的な改宗によつたということです。例えば、12世紀ころのスーヒー達は「持てるものは只その身体を覆うにも不十分な布一枚であつたとか、彼の財産といえばたった一枚の木製のドア一枚であつた」とか伝えられるように、極めて質素な生活をしていました。しかし、その心は非常に気高く、その精神の純粹性はイスラーム教徒は勿論、ヒンドゥーの人々まで引付けて止

まなかつたと言います。この中には多数の仏教徒が含まれています。

さてスーヒーの基本は、神への絶対的な帰依と並んで、誠心から祈りを捧げることによつて形成されました。彼らは神の慈悲を信じ、神の愛に包まれているという確信をもつて生活しておりました。ですから、この世の一切の不都合に關してはまったく意に介さなかつたのです。そして、この神の愛にすがること、人間は神と合一できるのだと考へたのです。この神の愛による合一体験、即ち神への祈りこそが、スーヒーが希求する祈りの帰結なのです。この究極的な目的のため、言い替えればこの神との合一という神秘体験をとうして、スーヒーたちは、ヒンドゥー教という違つた神の体系と信仰形態を持つた宗教と精神的な共有部分を形成していったのです。この点に關しては次の機会に譲ることになります。

インド留学記 その一

インドの「Ragging」

(“Ragging”)

東方研究会専任研究員 高橋堯英

東方学院総務・阿部慈園先生とのお縁で、この一文を書かせて頂いております。

私がデリー大学のセント・ステファン・カレッジに入学した一九七四年に、阿部先生もプリンスタ大学での研究を始められたようで、デリーの日本情報文化センターの所長として滞在されていた大正大学の栗山秀純先生のお宅で一度お会いしていたことを、東方学院で先生にお会いした時懐かしく思い出すことが出来ました。休暇のつど、インド各地の史跡を巡りながら見聞を

広めておられた先生の話が印象的で、「インドを見て肌を感じる」ことが留学生にとって如何に大切かを教えて頂きました。

「多様性と統一性」ということがインドについてよく述べられます。私は、「インドは丁度丸いスイカのようなもの」とつぶねづね思っています。縦に切るか、横に切るか、或は斜めに切るかによって、さまざまな切り口が表れるように、インドもまた、接し方次第で色々な顔を見せまします。決して「これが本当のインドなのだ」など

と断定出来るものはない、と思えてなりません。私の経験したインドは、主に、首都デリーを中心とし、英語を母国語(?)としてゐる階層のインドであります。まず、デリーのカレッジ・ライフを覗いてみましょう。

デリー大学では、通信教育を除くと、二十程のカレッジで学部の講義が行われています。学生は、これらのカレッジの何れかに入学し、年度末に行われるデリー大学の進級試験・学位認定試験を受け、大学の発行する学位を受けるのです。

私の学んだセント・ステファン・カレッジは、一八八一年にケンブリッジのミッシヨン・カレッジとして設立されました。英国によるインド帝国支配が進み、官僚機構が膨れ上がつて来ると、インド行政事務官 (Indian Civil Service) として送られて来る英国人の若者たちだけでは間に合わなくなつてきます。そこで、英国政府

は、安く雇える現地民事務官の養成をはかり、高等教育機関を設立していきました。このカレッジも、そのような背景を有するものです。一九八一年には創立百周年祭が祝われ、チャールズ皇太子が訪れ、「インドとイギリスの友好的関係の促進のためには、このようなカレッジが発展して行くことが大切である」という趣旨の講演をされたのを私は記憶しています。

ちなみに、パキスタンの故ジア・ウル・ハク大統領も卒業生の一人で、T字形をした校舎の中央に位置する講堂の、入り口のホールには、シエークスピア・ソサイエティーの一員として演技してゐる学生時代の彼の姿が写真の中に残されています。

今は男女共学となっておりますが、当時は男子校で、一千二百名程の学生がおり、その内の四百名程が寮生としてキャンパス内に住んでいました。ここでは寮をホステルと呼ばずレジデン

ストと称し、設備と環境の充実に十二分の配慮をしていました。六棟からなる寮では、一年生は二人部屋ですが、二・三年生、修士コースの学生には個室が与えられ、四部屋に一人ずつジツプと呼ばれるサーバントがいて、掃除や身の回りの世話をしてくれたのです。一棟に二人の独自の講師が住み込み、また、家族を持った先生たちも寮のすぐ側の教員宿舎に住み、学生と教員との距離をなるべく縮めようという努力が払われておりました。

寮生であることは、一種の特権を有すること、夕方七時半頃の閉館ぎりぎりまで図書館を利用できますし、気楽に先生方に質問するチャンスがあることもその一つです。ですから、進級試験で一科目でも落第するようなことがあれば、次年度は寮に住む権利を剥奪されるのです。つまり、勉強出来る環境を活かせなかったことへのペナルティーということです。

入学後の最初の一ヶ月間はラギング ("Ragging") の期間。要するに、上級生が新入生を徹底的に虐める期間なのです。寮では特に盛んに行われました。新入生は上級生に敬意を払い、言葉の最後には「サー (Sir)」を付けて答えねばなりません。虐めは嫌なものです、「あいつに、午前二時にミルクティーを届けなければならなかった」「おれは、昨夜一時間以上もマッサージさせられた」などという不平不満の満ちた会話が新入生の間で交わされるに従い、いつしか広いインドの様々な地域から集まった学生の間に仲間意識が芽生えだすのが不思議です。上級生にしてみれば、この一ヶ月は、新入生に自分を印象づけ、同時に、以後つき合えるような自分と同じメンタリティーを持った新入生を探す期間でもあるのです。そして、この一ヶ月のラギングの最終日の深夜、女装した新入生の寮生が先輩たちの前でキャバレー・ダンスの真似事を

披露するという儀式が終了すると、先輩・後輩という差別が一切取り払われ、一年生が上級生と対等な一個の存在と認められるのです。

故インディラ・ガンジー首相が非常事態宣言を発令した年、余りにもひどい「虐め」の結果、インド各地の大学や士官学校で死者が続出したためラギングは禁止されてしまいました。しか

し、私のカレッジでは、適度な「虐め」というメディアを通じて、様々な文化的背景を持つ学生たちの結束が図られ、カレッジの構成員としての意識の深化が図られていたのです。伝統を悪しきものにするのも、素晴らしい伝統とするのも、結局は人の心、理性に依るのだ、ということなのでしょう。

(つづく)



ZENマウンテンセンター

夏安居に参じて

沖田玉映

ロサンゼルスから車で二時間半離れたマウンテンセンターは地名のとおり山脈の中にあつた。このZENマウンテンセンターにて五月二十九日から九十日間の修行が始まつた。

当地で最初に感激したのは、雄大な自然と紺碧色の青空であつた。岩や山肌が直接見える山脈は、どちらかというとサバク氣候型に近い。

どうしてこんなに空が青く澄みわたっているのだろう。少しでも雲を見つけるとほっとするほど、ほとんど毎日快晴がつづいた。生まれて初めて野性のサボテンを見た。日中は日差しが強

く乾燥しているため、樹陰は嘘のように涼しい。ふと、はるか昔、遠い印度で長い布教の旅をされた釈尊が大樹の木陰で休まれた光景を思い浮かべた。夕方になると急に温度が下がり、セーターを着こんだ。夜ともなれば、空気が澄み、満天の星空が広がる。星の多さに、北斗七星をすぐに見つけられないほどだ。

晨朝三時四十五分に振鈴(起床)、夜は九時に開枕(就寝)。しかし、外は暗闇の中、足元を月の光が照らしてくれる。電気のある生活に馴れてしまっている者には、こんなにも月の光が明

るいものかとあらためて知らされる。

冬になるとあたりは雪に埋もれる。松、桧、チーク等が遅しく見事に成育している針葉樹が多い。特に松は、日本なら天然記念物になるぐらいの大きな松がいたるところに聳えている。松の木のことを英語で「ポイントウリー」と呼ぶ。松毬まつぼっくりがパインぐらいの大きさだ。まるで松の木にパインナップルがなっているように見える。

極暑の夏、よく目をみはれば、野草がひっそり可憐に凜しく咲いている。知っているものもの名をあげると、のこぎり草、パープルピナス、ねこじやらし、笹桔梗、水引草、ブライダルベール。おみなえしによく似た花も見える。

この松や野草を連想させるかたが、実道、安養ご夫妻である。お二人は、前角老師の高足であられ、年間通してこのZENマウンテンセンターを管理されている。

実道先生は日中、ブルドーザーを動かしてみな先の頭に立って作務（労働）をされる。わが国の金沢の大乗寺にて修行された経験を持っておられ、われわれ修行僧に対してこまやかな心配りをされる。ダルマトーク（説教）のとき、接心会（一日中、坐禅をしている特別な期間）に、こうして大勢のかたがたと一緒に坐禅をし、話をする機会を得て大変にうれしいと話される。

奥様の安養さんは金髪のうりざね顔の美しいかたで、昨年、誕生した赤子を背中においてながらテキパキと働きまわる。お互いに助け合いながら、ZENマウンテンセンターにくる人に笑顔をやさずお世話をされる。その菩薩行の姿に、小尼はいつも心の中で合掌をする。

平生は午前中に約二時間半の作務を全員で行う。小尼はずっと典座寮（台所係）であった。典座寮の主任（典座）は、フアコンというポー

ランドから来た三十二歳の女性であった。かの女はヨーガから禅に興味をもち、前角老師の高足である元峰先生より戒を授けられた。父親がオランダ人、母親がフィリピン人という。もう一人は、パンとお菓子係を担当するグレーク。かれは二十二歳の米国青年である。

三ヶ月の安居中（修行期間中）はすべて精進料理であった。ただし日本の精進料理とちがひ、バター、ミルク、チーズ、ハチミツ、ピーナッツバター、ヨーグルト、クリームなどの乳製品を豊富に使うため、とても栄養価が高く、こちらの人々がコレステロールを気にすることがよく理解される。

朝はコーンフレークに似た「グラノーラ」というナッツなどの木の实や大麦小麦をミックスしたもののうえにハチミツ、ピーナッツバター、ミルクをかけて頂く。ときには、オートミールや「レスク」と呼ばれるトウモロコシの粉に水



ファコンとグレークと筆者（左）

を加えて、それを加熱しながら練ったものを頂くこともあった。まわりの人々が小尼に「日本食が恋しくないか」と声をかけて、心配してくださったが、米国へ来てまで日本食を頂くようでは何の為に留学したか意味がない。その国の文化を知るためには、その国の食物を頂くこともその一つであると思う。幸に何を頂いても美味しくおぼえた。

こちらの包丁の使い方は押し切り、つまりブツ切りである。お米は洗わず、直前に、しかるべき分量の水を入れて炊く。日本料理は素材の自然の味を引き出し、色合いを大切にすることをむねとするが、こちらは総合の味を如何に美味しくするかポイントを置くようである。それゆえ、沢山のスパイスを使い、色合いを気にかけない。

典座寮の仕事は、まず第一に決められた時間内に食事を作らなければならない。三度三度、

口に入るものであるから、手を抜くことはけっしてできない大変な仕事である。まだこちらの生活に馴れていないうえに、言葉の不自由な小尼にたいして他の寮衆はさぞ大変であつたろうと思う。小尼が米国料理を覚えて帰りたいといえば、忙しいのに、材料はこれとこれといって親切丁寧に教えてくれた。典座和尚はよくできた人で、どんなことがあつてもけっして怒つたり、強い口調でいうことはしない。グレークは小尼が甘い物が大好きだと話すと、いつもできてたてのパンやクッキーを味見しろともつてきてくれる。

こんな事も思い出す。フアンコンが本を見ながら一所懸命海苔巻を作つた。小尼に「食べてみて」とさしだした海苔巻は、ほししいたけを水で戻しせん切りにし、何の味付けもしていない生のままを、わさびと一諸に入れて巻いたものであつた。一口ほうばつたとたんに、外米(ス

テック米)のご飯が、ボロボロと落ちる。赤酢を使いご飯が紅色している。せつかく作ってくれたものを、今さらあれこれいうわけにもゆかず、「Good!»(おい!)と、本人はとても喜び、メンバーのみなも「Sushi.Sushi(寿司、寿司)」と言って喜んでくれた光景を思い出す。

典座和尚は、料理を作るばかりでなく、典座寮を清潔にすることも忘れない。高祖様の著述された『典座教訓』(食事作りをする心構えを示した教え)を拝読されたのであろう。その書物の一節「一茎草を念じて仏殿を建立する」というお示しのとおりファンコン師は普通の家庭ならば捨ててしまうものでも、使えるものはすべて使うという気持ちを実践された。三ヶ月間、同じ料理を作ったのは数える程しかなかった。ZENマウンテンセンター夏安居参加のメンバーは次のとおりである。三ヶ月間ずっと修行する人。仕事の都合上、とびとびに参加する、

いわば流動的な人。多い時で約七十名を数えた。遠くはヨーロッパや南米からこの山まで飛行機や車を取り継いで来たものもいた。これは、まさに前角老師の徳風の広さと深さの賜物ということができる。

米国社会の人間関係は横の関係とみられる。センターにおいては、前角老師が絶対なる存在者であり、あとのメンバーはみな対等(友達)の関係である。

みな老師様を尊敬し、敬慕し、大切にしている様子が膚で感じられる。

毎朝、作務ミーティングが野外でもたれる。まず全員で、『消災妙吉祥陀羅尼』を立礼で唱えてから、ミーティングが開始される。立ったまま、片手にカップを持ち、コーヒーやティーを飲みながら話が進められるおおらかさに、少しく驚いた。

おおらかさといえば、ここは一ヶ月に一度し

か雨が降らないので、たまたま雨が降って来たときに、小尼が洗濯物を取り込もうとしたら、「じきに乾くから、そのままでよい」といわれたことがあった。ここではどんなに忙しくても走る姿は見かけない。いつも小走りに駆けているのは、よく考えたら小尼一人だけであった。日本にいたとき、いかにせわしなく動いていた



かを思い知るに至った。

さて、無事に三ヶ月の夏安居も終日を迎えた日に、法戦式と合わせて陽光寺ご開山、仙外道雲大和尚休広忌(七回忌)、および当センターの開山堂落慶法要が挙行された。

はるばる日本から志保見道元老師ご夫妻と随行十五人が随喜された。見晴らしのよい山の中

腹に仙外道雲老師の無縫型の墓碑が建てられ、そこに日本から請来された老師のご分骨が納められた。納骨および墓碑開眼の供養がねんごろに営まれた。

その後の昼食会の席で、道雲老師と前角老師との素晴らしい出会いのことどもを拝聴し小尼は感激した。伽藍とともにますます仏法が栄えていくZENマウンテンセンターの姿に泉下の道雲老師は、きつと法悦されておられることと拝察する。前角老師にも、さらなる法臘延長と福寿無量をただただお祈りするのみである。

このセンターには、だれでも“Welcome!”とあって受け入れる寛大な心がある。例えば、応量器の扱い方も米国スタイルとか日本スタイルとかいって、お互いに笑ってみせるけれど、仏様から見たら何々スタイルなどないのかも知れない。すべてにわたって善し悪しなどはないのかも知れない。善悪や何々スタイルなどと区別

をつけるのは、己自身の我見によるものであることが、日本を離れたアメリカの地であらためて知ることができた。

このすばらしい大自然の中で修行させて頂く縁を心から感謝したい。松林に囲まれた禅堂で坐禅し、己自身が我見をとりはずした真さらな自分にならなくては、と心に念ずる。そして、本当の自然つまり無情説法の何たるかを自分に問いつづけている。小尼は、この雄大にして悠然とした大自然にはぐくまれて、少しでも大きな人間になって帰りたいと切望している。

気がついたら、「光陰矢の如し」といわれるように、九十日間の夏安居はあっというまに終わってしまった。大勢の方々にお世話になった。空になった自分の部屋で頭をたれる。縁有れば再びここを訪れることができよう。縁無ければこれが最後と思ひ、ZENマウンテンセンターの山を降りたのであった。合掌

世界は開かれる——禪寺での一日

南フランス別院 ルース・浄信

コン、コン、コン 夜明けの静寂の中に響く四角い木の板を木槌で打つ音。朝四時、すでにじつとりと蒸し暑い。二階では床から起きたし布団をたたむ人々の音がする。一番早く起きた人々は、すでに外に出て金だらいで顔を洗っている。長い袖の墨染の衣を身につけ裸足で今日の第一回目の坐禅の為に禅堂へと急ぐ。庫裏では典座(注・1)が粥を暖めている……瑞岳院での一日が始まる。

五時、今度は鐘の音。その軽い音に小鳥達の

朝一番のさえざりが応える。朝陽が昇る、そして雲の浮かぶ空に向かって樹木は葉を振るわす。手を合わせ、足早に、人は皆本堂に向かう。ある者はまだ眠りからすっきり覚めていないようだ。一回の週末だけを、あるいはもう少々の日々を過ぎしに來た、招待客達であり時には些か戸惑いを見せている。

僧侶は線香に火をつけ、蠟燭を灯し師を迎える為に部屋を整える。僧侶達の低い読経の音が最後の鐘の音の終わりに重なる。



朝食がおわるやいなや、活動は密にしかも計画的になる。その前に、雲の形をした青銅でできた雲板の合図で人々はそれぞれ茶碗を差し出してご飯と沢庵を頂く。これが一日の始まりの食事である。それは茶の湯の作法にもにている。正確なる動作、集中度、静寂な雰囲気。その後にお寺の掃除のときがくる。ほうき、塵取り、バケツ、そして雑巾が土間に一列にならんでいる。一言のおしゃべりも無い。しかし注意は他の人に向けられて調和がある。

この調和こそが一日の本質そのものを築いているのである。強制されるから、あるいは、団体生活をする上の義務だから皆が同じ時間に同じ事をするというのではなく、各人が他の人に注意をむけてその人達の実践に合わせようと努めているからであり、少なくとも他の人達の邪魔にならないように努めているからである。

「私、私はこうしたい、私はこうする習慣があ

る”といったすつかり自分の中に根を降ろしてしまっている”己”中心の考えかたをすてることは時として難しいことである。ここでは、禪の修行を通して、自分を学ぶことができるのである。

それに、寺に着いたらまず始めに心に留め置かなければならないのは数々の音である：木製や金属製の太鼓や鐘などが一日の各時間を示す。坐禅と坐禅の間の作業時間(作務)、食事時間そして笑い声とおしやべりに包まれた、一時のくつろぎである戸外でのお茶の時間(大歓迎される)、そして一日の始まりと終わりを告げる音。春には鳥の鳴き声、夏には耳をつんざく蟬の声、又彼方に流れる川のざわめき。

この寺の事を語るときこれ程身近にある自然を思い起こさずにはいられない。瑞岳院は町から歩いて一時間、松や針葉樹の森の中に隠れ、街道の最後の曲がり道でやっと目に入るところ

にある。隣人といえば栗鼠、鹿、狐、そして時にはさまざま熊だけである。

四季は直接的で荒々しい：夏は暑く、冬は寒い。安楽な生活に慣れきった我々にはこんなごく自然な事実も驚異に思える。電話も無く、電気も無し、殆ど暖を取らず、冬にはしばしば水も無い……。これは”良き時代”神話への懐古ではないが、日常注意も払わずにいる当たり前の出来事を直に体験する機会なのだ。水を汲むとき、水の本当の味を味わえ、薪を準備しては暖かいはどんなことを識る。数日間物を使わずに体ごと日常生活にぶつかっていくのである。

おしまいに、日本の生活の特典である”お風呂”がある。夕方五時半、一般に一杯の”うどん”か”そば”の軽い食事が済むと、熱い風呂の時間である。そこで今日の疲れを癒すのである。木を切り倒したり幹をはこんだりあるいは

庭仕事をやらなければならなかった哀れな都会人たちよ！その上、数時間も坐禅を組んだための痛みもある。風呂の後には、小休止がある。

たばこをのんだり、一言二言言葉を交わす。幾人かはや一日で一番長い一日の締めくくりになる二時間近くの本日最後の坐禅に思いを馳せる。

また鐘の音。朝よりもゆっくりと重々しく。朝と同じ人影、同じ素足がピカピカに磨き抜かれた廊下を急ぐ。夜の坐禅、自然がみな静寂に戻り、闇に包まれる時間。音もなく、それぞれ自分の場所にすべりいり、お辞儀をして座蒲団を敷いて壁に向かう。導師が登場する。僧侶が線香を渡す。祈りを捧げる為に平伏する……衣ずれの音……すべては蠟燭の灯の下で黄金色である。一時、禅堂は乾いた警策（注・2）の肩を打つ音に打ち震える……再び静寂に戻る。より一層深く、生き生きと。

最後の人影。典座がすべてがととのっているか明日のお米はとがれているか、夜中鼠がひいていくようなものは何もでないかを確かめる。もう一人の僧侶が部屋の近くに置かれた石油ランプの炎を調節し皆が部屋に引き取ったかを確認すると仏壇に最後の一札をする。

コン、コン、コンまた新しい一日が始まる。

昨日と同じ、私が滞在した数年間に流れた日々と同じように……沈黙、作業をして坐禅の一日が……。コン、コン、コン普段と変わりないこの日、昨日よりは一層暑くなるかもしれない……。だがそのうちに流しには氷が張り、素足に床の寒さが突き刺さるようになるだろう。軽い夏布団を厚く重い冬布団に変えねばならない。そして毎日の作業を行う共同の部屋にただ一つのストーブを掃除することも必要になる。コン、コン、コン撞木を持つ僧の手に雪片が舞い落ち夜の闇はより一層濃く真の暗闇となり禅

堂にもランプを持っていかねばならない。水道の導管は凍てつき水を汲みに二人の人間を典座は川へやる。

坐禅を組み、労働をし他の人とともに食事を頂き、食事を作り、近隣の村へと托鉢にでかける。一日、また一日。単純な日々である。一つのことをなしておいたら次の事にかかり、共同体の調和を保ち、他の人と共に、他の人の為に安らかな気持ちで働く。水を汲み、木を切る。これが先人によって与えられた禅の生活の定義である。日常生活の中で、少しの空間で、しかし想念は広く外にむけられて……。ただ一人、しかしながらいつも他の人とともに本質のみが残された空間を作り上げる。禅とはこんなにもシンプルなのに我々は何と複雑なのだろう！物があるがままの姿でとらえられる様になるには幾多の年月が必要だろう。暑かれ寒かれ、騒がしかろうと静寂だろうと、坐禅の時だろうと作

業の時だろうと、ただ一つ常に同じ——人生はあるがままだ！

一片の塵の中に、宇宙のすべてがある。

花が開くとき世界は開かれる

(禅林句集、十五世紀)

注(一) 台所と食事を担当する人。寺の五人の指導者の一人。典座の仕事は一般にかなり禅の実践の経験を積んだ人に委ねられる。料理がうまいかということは実際たいした問題ではない。委ねられた仕事をうまく成し遂げようとする努力、それに向けられる細心の注意が大切なのだ。食事を供するというのは寺の住人が支障のない生活を可能にすることである。多すぎもせず少なすぎもしない食事を整えること、皆に行き渡る食事を準備することだが無駄をだしてはいけないのだ。何故なら

寺は喜捨で生計をたてているのである。したがってしっかりした選択眼を持ち、広い視野で判断できなければならぬ（大まかにいうと、私はこれが好きだからたくさん作るというのとは正反対である）。食事を準備するということは、貴方の実践が見られ、感じ取られ、食べられ、皆に導かれているということなのだ。

（2）時に導師は長い木の棒で坐禪を組んでいる人の肩をたたく。それは罰を与える意味ではない（禪堂は小学校ではない）が禪の実践が出来ない人を助ける為である。たたく前後に師と弟子はたがいに尊敬の念を持っているという意味をこめて礼をかわす。



ラーダーラマン神の一日

東方研究会専任研究員 及川弘美

さて、今回も前回に引き続きラーダーラマン（ラーダーとクリシュナのこゝ）寺院のムールテイ（神像）についてお話ししましょう。

ムールテイが、毎日手厚く世話されることは前回触れましたが、どのように世話をされるか少し詳しくお話したいと思います。ムールテイは、毎日アーラテイといわれる儀式によつて祀られます。アーラテイとはヒンドウ教一般に見られる伝統的な儀式です。ヒンディー語の辞書を引くと「献火・神像の頭上に燈火を捧げる礼、非常な尊敬、愛、奉仕を捧げること」とあるように、アーラテイは木でできたラクリーと

いわれる棒状のものを数本、ギー（精製バター）に浸して火を灯して燭台に立て、それをヒンドウ僧が右手に持ちムールテイの前にかざして、手首を小刻みに回転させながらゆっくり上下に動かすということが、数回繰り返される儀式です。ラーダーラマン寺院では、一日七回、特別なお祭りがあるときは八回アーラテイが行われます。それらアーラテイはそれぞれ名前があり、マンガル、ドューパ、シュリンガル、ラージボーグ、再びドューパ、サンデイヤ、そしてシャヤン・アーラテイという順でなされます。特別なお祭りの時には夕方の方の二回目のドュー

パ・アーラテイの前にウトウサバ・アーラテイ
があります。アーラテイではたいがい数本の灯
火が用いられますが、三本または一本の灯火の
みのアーラテイ（マンガル、ドユーパ、シヤヤ
ン・アーラテイ）、トウルシー樹の葉を用いた儀
式を伴う灯火のアーラテイの後、聖なるヤムナ
ー河の水の入ったほら貝を用いて同様にアーラ
テイがなされる場合（シユリンガル、サンデイ
ヤ・アーライ）、灯火ではなく花を載せたお盆を
用いたアーラテイ（ラージボーグ・アーラテイ）
など多少違いがみられます。ところで前回、ム
ールテイのダルシヤン（参拝）は一日に二回と
述べましたが、ダルシヤンは時間の長短があり
ますが、各アーラテイ毎にできることを訂正し
なければなりません。そもそもアーラテイは外
部から入りこんでくる邪悪なものを払うという
意味があり、そのためムールテイが人前に姿を
現す時に、必ず行われる儀式なのです。なかで

も最も信者の参拝が多いのが、前回述べた時間
帯に行われる早朝のマンガル・アーラテイ、夕
方のサンデイヤ・アーラテイなのです。

これらのアーラテイはラーダーラマン神の
日々の生活の営みと対応して行われます。まず、
最初のアーラテイはラーダーラマン神の起床と
共に三本の灯火のみ用いられて始まります。こ
れがマンガル・アーラテイです。神の起床時間
は夏季は午前四時半、冬季は同五時半、他の時
季は同五時と決まっています。神は起きたばか
りで、まだ衣装はきていません。アーラテイの
後、幕は閉じられ、神は沐浴をします。午前八
時半前後、灯火が一本だけの簡単なドユーパ・
アーラテイが済むと再び幕が閉じられ、神は朝
食を取ります。第三回目のシユリンガル・アー
ラテイは、午前九時半から十時位の間に行われ
ます。この時、ラーダーラマン神は美しく着飾
られて姿を現し、アーラテイは五本の灯火、ほ

ら貝、そしてトウルシー樹の葉などが用いられます。最後に、僧は台座に置かれた鏡を取り上げ、神の正面と両脇からの姿を神自身に見えるように映しだします。まるで、その様子はその着飾られた姿に神が満足しているかどうか、お伺いをたてているかのようです。さらに驚いたことには、毎日違った様々なきらびやかな美しい衣装が、神に着せられるのです。まったく、女性にとつては羨ましい限りです。そして午前十一時半頃、第四回目のラージボーグ・アーラティの後、昼食を取ると、午後はずっと夕方の次のアーラティまで神のお昼寝の時間となり、寺院の扉も閉じられあたりはひっそりとなりま

す。午後六時頃、朝の時と同様にドユーパ・アーラティがなされます。アーラティの後すぐ幕が閉じられ、神は軽食をとり、次には新たな装いで登場します。そしてサンディヤ・アーラティが行われます。灯火は今までのアーラティの

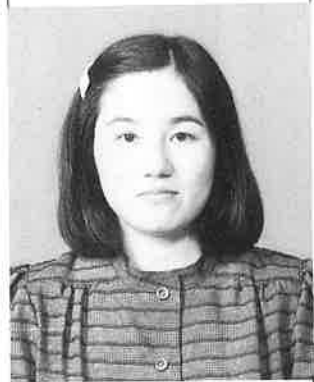
中で最も多い九本の灯火が使われます。他はシユリンガル・アーラティと同じです。この後、神は夕食を取り、装飾がはずされ、身体がきれいにされ就寝の準備が始まります。午後九時前後、就寝前のシャヤン・アーラティがひそやかに執り行われて、ラーダーラマン神の一日が終えます。

ラーダーラマン寺院では、ラーダーラマン神がこの世に顕現したとされる日から今日に至るまで約五百年近くにわたって、一日もかかさずこのように手厚く世話され、礼拝されてきました。そして信者たちはそれを当然のこととして受け入れ、ムールティの神性を疑うこともなく、毎日参拝にやって来るのです。こうしたラーダーラマン寺院での光景は、信仰心の薄い私に改めて、信仰とは、神とはなんであるのかを考えさせられるものでした。

デリーのバス事情

ホームステイをしている間は、近くのバザール（市場）に買い物に行くのにも、奥様たちと運転手付きの車で出かけていた。デリーの繁華街をあちらこちらと連れていっていただいたにもかかわらず、自分の足で歩いていかなかったせいか、デリーにいながらしばらくは市街全体の土地勘が全くつかめなかった。

寮生活をはじめてからようやく、必要にせまられて遠出もしなければならなくなったこともあって、一人でバスに乗ることができるようにな



東方研究会専任研究員
清水晶子

なった。これもいろいろな人たちにオリエンテーションしていただいた上でのことである。デリーの町のなかを走っているバスは、設備の整った立派で快適な日本のバスしか知らない人にとっては、想像を絶するものともいえようか、とにかくすべての点においてものすごかった。

デリーのバスにはほとんどの場合扉がついていない。冷房の設備がないため、暑さの中、風通しを良くする必要もあろうが、バスにとび乗らなければならないことが多く、ドアがあつて

はじやまになる。デリーのバスには、乗るのではなくて、とび乗らなければならず、大いなる覚悟と相当の運動神経と、さらに多少のずうずうしさが要求される。慣れないうちは、お目当てのバスが来ても、バスに殺到する人々の群に圧倒されて、ぼう然と何台ものバスを見送った。人口に比してバスの台数が不足しているのか、どこのバス停も、いつも大勢の人々であふれていた。三十分や一時間待たされることはざらである。インドでは何事も気持ち大きき持たないといと、とうていやっていけない。

乗客もさることながら、運転する方のマナーもなかなかのものだった。バス停の停車位置にきちんと止まってくれるバスは珍らしい。暴走車のように待っている人々の中に、スピードも落とさず突込んでくるようなバスも多くて、危険極まりない。このような状態だったので、乗降に際して事故が発生しやすく、しばしば問題

となっていたが、一向に改まる様子はなかった。

デリーには、東京のように都市を網羅する電車の交通システムは整っていない。中流以上の人々は、自分のスクーター（バイク）や車を所有している。だからバスは庶民・貧しい人々にとって、なくてはならないものである。それで、デリーの町にはバス路線が細かくはりめぐらされていて、込み入ってはいるが、そのルートさえ把握していれば、たとえ時間がかかってもたいていの所へはたどり着ける。バスが先のような事情なので、バスの番号と車体の正面上部の案内板にヒンディー語かローマ字で書かれた行き先を瞬時に確かめて乗り込むには、それなりのテクニクを要する。バスには後部から乗車し、入口の車掌に料金を払って、前に進み前部から降車する。乗客が乗車口のステップに足だけかけて、正に鈴生りといった状態で、外部の手すりにしがみついたまま、その重みで左側に

傾いたまま走っているバスを目にしたときは、人々のバイタリティーに脱帽した。

進行方向の左側の前半分が女性専用の席として設けられていたが、とても用をなしているとはいいがたかった。ときどき、中年の体軀堂々たる女性が、平然と女性席に腰掛けている男性を叱責して、席を譲るように言っている場面に出くわすこともあった。私はバスの中を人をかきわけていたりするのが嫌だったので、これは本来いけないことらしかったが、よく前部から乗降していた。そのうち何人かの運転手とも顔なじみになった。瞑想するシヴァ神の絵を入れた額を運転席の前にお祀りし、マリーゴールドの花輪で飾っていた運転手は親切だった。混んでいるときは、運転席の横に出っぱっているエンジンカバーの上に座らせてくれた。バスに設えた祭壇のお香の煙が、信仰に篤いインドを実感させた。荒っぽい運転も、神様のご加護が

あれば大丈夫というところであろうか。交通規則はあつてなきが如くの強い者勝ちのインドでは、何ととっても乗ってしまえばバスが最も安全である。料金の交渉をしなければいけない面倒なオートリキシャ（三輪の車）より、安くて料金の決まっているバスは、私にとって大切な足であった。

デリーのバス事情は、お世辞にもすばらしいとはいいい難かったが、ボンベイを訪れたとき、車掌のきびきびした仕事ぶり、人々のスマートなマナーに関心させられた。大きなポストンバッグを持ってバスに乗っても、少しの不便も感ずることはなかった。とはいいいながら、帰国してすぐ、日本のバスのふかふかのシートに腰をおろし、ピカピカの窓ガラスごしに鉛色の冬の景色を見ながら、なぜか紺詰めデリーのバスのことが懐しく思い起こされた。

本山参拝の一日

——三松閣落慶・御移東八十年記念法要に参列——

大本山総持寺では、昨年三月、檀信徒の研修道場、三松閣が落慶した。

加えて昨年は、総持寺が能登から鶴見に移転して八十年を閲した記念の年でもある。

それで、三松閣落慶・御移東八十年記念法要がいとなまれ、全国各地からの参拝団が引きも切らず、本山は連日大にぎわいであつた。

わが善光寺でも檀信徒の皆さんに呼びかけたところ二百七十有余名の方々のご参加を得、去る十一月六日、快晴に恵まれ、初中後無事本山

参拝を了え、参加者ご一同より感謝されている。

十時半、本山三松閣ロビーに集合完了。

三松閣は、全国一万五千方寺と八百万檀信徒の信心の結晶になるもので、総工費五十数億円、地上四階、地下二階、延べ面積三千坪、エレベーター四基を装備する超近代的な建物で、鶴見ヶ丘に堂々として天空にそびえている。

玄關に入ると、煌々と輝くロビーで、何百人の団体もひと呑みするほどの広さである。ここで受付を済ませ、二百五十畳敷きの四階大講堂

に登り、参拝の心得を拝聴し、輪絡子をいたゞき、身も心も清々しく引き締った気分で大祖堂に移動。ここはまた畳千畳敷きのご本堂である。まず本山開祖瑩山禪師と二祖峨山禪師にご挨拶の拝登諷経、続いて各家のご先祖への供養諷経に参列して進前焼香。法要了って再び三松閣に戻り、地下一階の齋堂（食堂）で朱塗りのお膳につき、一同「五観の偈」を唱えて静肅に昼食をとり、休む間もなく地下二階の講堂に入って佐藤老師の法話に耳を傾けた。

当初は法要終了して三松閣に戻る道中を諸堂拝観にあてたのだが、何しろ本山は広いため移動に要する時間が長く、諸堂拝観を組込み得なかつた。法話の終わったのが二時過ぎで、もはや帰宅の途につく時刻となつてしまつたので、希望者のみ、四階の大講堂で、ビデオによる諸堂拝観とすることとし、法話終了して解散とした。佐藤老師の法話はおおよそ次のようである。

瑩山禪師と鶴見のご本山

一 仏 両 祖

日本の禪宗には、曹洞宗・臨済宗・黄檗宗の三つがあり、私どもの宗旨はその中で一番大きい曹洞宗であります。「ソードーシュー」と濁つて発音する人がありますが、これは濁らないで「ソートーシュー」と澄んで発音するのが本当であります。

曹洞宗では一仏両祖をお祀りいたします。一仏とは一人の仏さまと書きまして釈迦牟尼仏のこと、両祖とは二人のお祖師さま、道元禪師さまと瑩山禪師さまのことであります。

釈迦牟尼仏は、普通「お釈迦さま」と申しまして仏教をおはじめになられたお方であり、そのみ教えを摩訶迦葉尊者がそつくりそのまま

承け継がれ、摩訶迦葉尊者の仏法を阿難尊者がこれまたそっくりそのまま引き継がれるというように、お師匠さまからお弟子へと、正しく伝わり伝わって第二十八代目の菩提達磨大師にいたりました。達磨大師は七転び八起きのダルマさまとして親しまれているお方で、インドのご出身であります。このお方がお釈迦さまから伝えられた正しい仏法をひろめるため、晩年になってから、三年の歳月を費して中国にやってきました。そして正しく伝えられた仏法、禪宗の中国における初代お祖師さまになりました。この達磨さまのみ教えを、二祖慧可大師、三祖鑑智僧璨大師というふうには、ちようどインドにおけると同様、あたかも一つのコップの水を一つのコップに移すがごとく、残さず漏さず正しく伝え伝えて、お釈迦さまからかぞえて第五十代目に天童如浄禅師がおでましになりました。ちようどそのころ、道元禅師さまが正しい仏法

を求めて、日本から中国、当時の宋の国に渡られ、諸処方々を遍歴されましたが、正しい仏法を伝えてくれるお祖師さまにめぐり会うことができず、一時はあきらめて日本に帰ろうかと思われたのですが、その時、「こんど天童山に住持された如浄禅師はお釈迦さまからの正しい仏法を伝授されたまことに素晴らしいお方だ」ということを風の便りにお聞きになり、早速天童山に登り、如浄禅師にお会いしました。お会いした瞬間、この方こそ長らく探し求めていた理想のお方だ、という確信を抱き、それから二年間、如浄禅師のもとで修行にはげまれ、ついに第五十一代目のお祖師さまに列せられて、日本にお帰りになりました。そして『正法眼蔵』という素晴らしいご本を九十五巻もお書きになり、また永平寺をお開きになられ、すぐれたお弟子を養成なさいました。しかしながら残念なことに五十四歳のはたらきざかりでお亡くなり

になりました。さいわいなことに、道元禪師から四代目、お釈迦さまからかぞえて五十四代目に瑩山禪師さまがおでましになりました。

瑩山禪師さまは、上下貴賤の別なく、また老若男女を問わず、遠い近いのわけへだてなく、実に多くの人びとから慕われ帰依を受けられた、まことに衆生縁の厚いお方で大勢の信者を教化済度なされ、すぐれた多くのお弟子を養成され、また諸処方々にお寺をお開きになり、五十四歳の時、総持寺を開かれたのであります。

総持寺開創に当たっては、瑩山禪師ならではのまことに素晴らしい不思議な話があります。

総持寺はもともと諸岳寺と称され、十一面観音さまを本尊に祀る真言宗のお寺でしたが、時の住職定賢律師の夢枕に観音さまが現われ、「ここ諸岳寺を去ること南に十一里、酒井保の庄に永光寺という寺あり、住持は釈尊五十四代目の法脈を継ぐ善知識である。汝、速やかにこ

の寺をかの聖者に譲り、永く仏法紹隆の道場たらしめよ」と告げられました。それから五日後の四月二十三日、暁天坐禪中、瑩山禪師は瑞夢を感じられました。それは、相好端嚴にして手に未敷の蓮華を持った観音さまが忽然として姿を現わし、「われ一所の寺基を師に与えん」と告げ、禪師を誘って古寺の三門に至ったところ、大勢の坊さんが出迎えております。瑩山禪師思わず「総持の一門、八字に打開す」と、入門の挨拶を述べました。そしてその樓門には錦繡で装幀した『大般若經』六百巻がそなえてあり、その手前に放光菩薩が祀られており、その周囲に堂塔伽藍が美しく建ちならんでおりました。瑩山禪師は坐禪中、夢覚めてしばし感歎これを久しうしたのであります。

それから一カ月半ほど経って六月八日、瑩山禪師が教化の旅に出て諸岳寺に近付いた時、この噂を耳にした定賢律師は、靈夢のお方はこの

人ならんと心に決め、山内の衆僧とともに出迎えられました。そして瑩山禪師と相見して、談たまたま霊夢に及ぶと、二人の靈感全く符号していることにおどろき、定賢律師は夢のお告げに従って諸岳寺のすべてを瑩山禪師に献上するのであります。快く受けられた瑩山禪師は、夢の中で唱えた法語に因んで寺の名を「総持寺」とし、諸岳を諸嶽にかえて「諸嶽山」という山号にし、律院を禪寺にかえて盛んな教化活動を展開されました。

こうした瑩山禪師さまの素晴らしい活躍、すぐれたお力はやがて後醍醐天皇さまのお耳に入り、仏法に対する十カ条のご質問が下されました。これに対する瑩山禪師さまのお答えがまたりっぱなものでありましたので、後醍醐天皇はことのほかおよろこびになられ、「曹洞出世の道場」とのお言葉を賜り、一宗の本山としての地位を確立したのであります。

瑩山禪師さまは四年後の五十八歳のとき七月七日、愛弟子の峨山禪師さまに総持寺を譲られ、翌月八月十五日、永光寺においてそのご生涯を閉じられました。峨山禪師は瑩山禪師のご遺志を継がれ、総持寺の基礎を磐石のものに固められました。

今日曹洞宗の寺院数は一万五千カ寺に及んでおりますが、瑩山禪師さまの教えの流れを汲む法系の方々の開かれた寺がその大部分を占めております。ここから他に類例を見ない一宗に二人の祖師、二つの本山があるという曹洞宗ができてきたのであります。

道元禪師さまは正しい仏法のタネを蒔かれたお方でありますから、一家にたとえれば父親に相当するお方であります。そこで高祖さまと申します。瑩山禪師さまは、道元禪師さまの蒔かれた正しい仏法のタネを国中にひろめられたので、いわばお母さんに相当するお方であります。

そこで太祖さまと申します。そして道元禪師さまの開かれた永平寺と、瑩山禪師さまの開かれた総持寺とともに大本山と申します。それから、道元禪師さまには承陽大師、瑩山禪師さまには常濟大師という大師号を賜っておりますので、

高祖 承陽大師 道元禪師

太祖 常濟大師 瑩山禪師

と申し上げるのであります。

以上申し上げましたように、日本の曹洞宗は、高祖さまと太祖さまのお二人のお力ででき、発展してまいったのであります。全国津々浦々にいたるまで曹洞宗のお寺がありまして、多くの檀信徒の方々が朝な夕なそのみ教えをいただいで暮らすことができるのは、全くこのおふたかたがおられたからであります。

能登から鶴見へ

さて、能登にあった総持寺がどうしてここ鶴

見にあるのでしょうか。それは、明治三十一年四月十三日夜、本堂の一部からあがった火の手が、フエーン現象の余波を受け猛火となって全山にひろがり、堂塔伽藍の大半を焼き尽くしてしまつたからであります。

その復興にあたり、時の石川素童禪師は「禍いを転じて福となす」ことを念頭に、都が京都より東京に遷り、政治経済の中心が京都・大阪より東京・横浜に移っている現状に鑑み、本山存立の意義と将来の宗門の発展を考えると、よろしく首都圏に進出すべきだという結論に達し、大英断をもって移東を決定したのであります。時に明治四十年。ここ鶴見ヶ丘に十五万坪の境内地を確保し、敷地、仮本堂、仮庫裏を建て、小田原の大雄山にお預かり願っていた瑩山禪師・峨山禪師、及び五院の真牌を正式に祀り遷祖式を執り行つたのが明治四十四年十一月五日であります。爾来八十年、時は流れて今日に

至っております。

八十年という歳月は、人間一個人の生命を尺度とすれば、まさに一生に相当する長い年月であります。大きな歴史の流れからすればほんの一瞬に過ぎません。その短い時の流れのはざまに、ごらんのように五十余棟の堂塔伽藍がその威容を誇っておりますし、また皆様がたのようにお詣りに来られる方々や参禅に来られる方々は日を追って多くなり、国内だけではなく、海外からもいろいろなかたがお見えになり、どうしても檀信徒の研修道場がなくては、ということまで三松閣が建築されたわけであります。

これはまさに瑩山禪師さまのご遺徳のしからしむところであります。

瑩山禪師の二大誓願

瑩山禪師さまは二つの誓願をおたてになりました。その一つは興法利生の誓願で、お釈迦さ

まから歴代の祖師さまがたが承け継がれた真実の仏法、正伝の仏法をどこまでも守り続け、その功德をあまねく一切の人びとに及ぼすこと。

いま一つは女人済度の誓願であります。瑩山禪師さま五十一歳の時、お母さんの懐観大姉が八十七歳でお亡くなりになりましたが、その臨終の枕もとの御遺言、「女性というものは苦勞の多い運命に定められて生涯を過ごさなければなりません。どうぞ、薄命の女性のために、ほんとうのしあわせになることのできる心のささえを与えていただきたい」というお言葉が瑩山禪師さまのお心にしみ込んだのでありましょう。

男尊女卑の風潮の甚だしい当時、瑩山禪師さまは敢然としてこの悪習を打ち破り、女人済度の誓願をたてられたのであります。

この女人済度の誓願を現代に生かしたのが総持学園の経営であります。大正十四年、瑩山禪師六百回大遠忌が奉修されましたが、その大遠

忌の記念事業として開校されたのが鶴見高等女学校で、当時は生徒数わずか十六名に過ぎなかったものでありますが、今や総持学園は、小学校を除いて幼稚園から大学まで七千人の女性を擁し、正しい仏法、禪を根幹とした教育によって大きな成果を挙げているのであります。(注・歯学部だけは男女共学であります。)

「宗教なき教育は賢い鬼をつくる」といわれます。賢い鬼は社会をこわすことはできても社会を建設することはできません。明治以来の宗教を排除した教育によって、今日の日本には賢い鬼がうようよしておりますだけに、正しい宗教に基づく教育ほど今日の日本に大切なものはありません。この点、総持学園に学ぶひとたちはほんとうにしあわせであります。そしてこれらの人びとがやがてはお母さんとなって子供を養育するのでありますから、その影響力は測り知れないものがあるのであります。

おかげさまでおかげさまの意味がわかった話

明治以来の無宗教教育に育てられた今日の日本人は、人格の中心をなすもつとも大切な敬虔の念を失い、目の前の利益追求にのみ心を奪われております。

この間私はある公民館で講演をして、何か質問はありませんか、とたずねますと、一人の中年男が手を挙げ、

「仏さまに物をあげても食べてもくれないし、ありがとうともいつてくれない。いったい何のためあげるんですか」

というのでした。十代や二十代の人の質問ならともかくも、この年ごろになってなんたることかと、いささかあきれた私は、

「いくらあんだでも、おかげさま」という言葉ぐらいは使うでしょうが、その意味はわかりますか」

とたずねました。

「そりや使いますが、意味は知りません」

というので次のように説明しました。

「お」と「さま」は、お・釈迦さま・というのと同じ敬語で「かげ」は陰、つまり霊のことです。

「このごろいかがですか？」とたずねられると、「ええ、おかげさまで」と答えます。

この簡単な言葉のやりとりでお互いのところは通じ合うのですが、これはどういう意味なのかといいますと、自分自らも努力もし注意も払っているが、それにもまして自分をこの世に送ってくれた祖先の霊が見護ってくださるから仕事も順調でまた健康なのだというのであります。その祖先の霊に対する自然に生まれ出た感謝の気持ちのあらわれが「おかげさまで」という言葉であり、言葉だけではなく形にあらわれたものがお供え物であります。昔の人びとは祖

先の霊に対してだけでなく、生きた人の霊に対しても同じ心づかいで接しておりました。

旅に出た人が旅さきでひもじい思いをしないようにと、あたかもその人が家庭にいますがごとくお膳を据えました。それが陰膳です…と説明しますと、質問したその人は、

「ああ、そうそう、私が海外旅行に出たとき、おふくろが陰膳を据えてくれたそうだ」

と、ひとり言のようにいいますので、私はただみかけるように、

「あなた、それを食べましたか。ありがとうございますか」

と聞きました。もちろん、食べるわけもないし、ありがとうございますともいわなかったというので、

「あなたが食べてもくれないし、ありがとうございますもいってくれない。にもかかわらずあなたに陰膳を据えなくてはならないお母さんの気持ち、どう思いますか」

という、

「そういわれてみると、ありがたいような気がします」

といつておりました。

この人は、はじめは恐らくひやかし半分に質問したのでありましようが、私の答弁を聞いて、「こりや、つまらんことを質問したなア」と反省したらしく、だんだん元気がなくなってきた。いささか気の毒にもった私は、

「恐らく今日の人の多くは、口にこそ出さないが、あなたと同じように疑問に思っているんじゃないですか。いや、今日だけではありません。六百五十年もむかし、しかも後醍醐天皇があなたと似た質問をしておりますヨ」といいました。するとその人は急に眼を輝かせて、

「へえー、そうですか。後醍醐天皇と私の考え同じですか」

「いや、いや、そうはやまっては困りますヨ」と前置きして私は次のような話をしました。

後醍醐天皇は深く仏法に帰依し、かつ研究もしておられました。それだけに仏教に關していろいろ疑問点も持っておられ、それを十カ条にまとめて、総持寺を開かれた瑩山禪師にご下問になられたのです。これを「十種の勅問」または「十種疑滞」といいますが、それに対する瑩山禪師のご回答が全く素晴しかったので後醍醐天皇はたいへんよろこばれ、瑩山禪師に紫のころもを下賜されるとともに、総持寺を「曹洞宗出世の道場」つまり一宗の大本山にするという御綸旨を賜り、かつそれまで無名だった宗団がはじめて「曹洞宗」と公称することができるようになったのであります。その、後醍醐天皇の御下問の一つに、「人は亡き父母祖先のために靈膳をあげ、茶湯を献ずるが、少しも減っていないではないか。それでも供養が行き届いている

のか」というのがあります。

これに対する瑩山禪師のお答えは次のようなものであります。

梅の花は垣根をへだてても匂ってきます。しかし、花のしべは少しもいたんでおりませんし、また私どもの鼻にもなんの跡形も残りません。心が通ずるとはまさにこのようなものです。供養とは目に見える変化のあらわれを期待するものではなく、それは雨や露が自然に草木をうるおし育てるように無心におこなわれるべきものであります。

陛下、もしこれで御納得いきませんなら、いまひとつたとえを申し上げましょう。私どもは手紙を読んで相手の用向きを理解しますが、文字や紙は少しも損耗しておりません。このように、まごころさえあれば、なんの変化はなくとも、念ずるところの精霊に供養は届くのであります。と。

「まことにわかりやすいお答えではありませんか」というと、質問した人は、

「おかげさまで、おかげさま」の意味がわかりました」

と答えて、よろこんでおりました。

おしやもじとすりこ木

仏さまにまごころの通ずる姿、それは合掌であります。

右ほとけ 左はわれと 合わす手ぞ

中にゆかしき 南無のひと声

右手に仏さまのお心を頂戴し、左の手に自分の心をこめて、右と左の掌をぴったり合わせた時、仏さまのお心と自分のまごころが一つになります。すると、「南無釈迦牟尼仏」「南無阿弥陀仏」「南無観世音菩薩」というお唱えが口をついて出てまいります。「南無」というのは、「私の心をあなたに差し上げます。あなたの心を頂

戴します。あなたと私は一つです」といった意味のインドの言葉であります。私ども日常生活においてもっとも大事なところはまごころで通じた仏の心、仏心であります。それについて申し上げたいことがあります。

この三松閣が出来るまではとなりの建物、香積台が本山の玄関でしたが、ここに大きなおしやもじとすりこ木があります。どちらも高さ五メートル二〇、重さは、おしやもじが八〇〇キロ、すりこ木が六〇〇キロという大きなものですので、あまり大きいため、気付かない人が少なくないのです。これは昭和四十九年の春に行われた瑩山禅師六百五十回大遠忌を記念して奉納になったもので、おしやもじのほうは皆様方檀信徒の方々の浄財によってつくられたものであり、すりこ木のほうは、本山のふるさと能登の門前町の町長さんが奉納されたものであります。

能登の総持寺に大きなすりこ木とおしやもじがありまして、明治三十一年の大火の際不思議にもこの二つは焼けなかったのであります。

おしやもじが寄進されるという話を耳にした門前町の町長さんは、能登の祖院と鶴見のご本山がともに栄えるようにとの願いをこめて、石川県の県木であるあすなるの木ですりこ木をつくられたのであります。

ではどうしてご本山の玄関にこうしたものがあるのかといいますと、この二つとも私たちの命の糧となる食べ物を調理するのに欠かすことのできない道具で、そのはたらきぶりはいずれもわが身をかえりみず他のために尽くしてくれるのであります。

おのが身は 水をも火をも いといなく

救い上ぐるぞ み仏の慈悲

とおしやもじが唱えれば、

おのが身を すりへらしても 人のため

世のためつくすみ仏の慈悲

(石川県千光寺住職 ほそかわ秋堂作)

と、すりこ木がこたえるように、まさに仏心そのものであります。それで時の貫首、岩本禪師さまは、おしやもじに「仏心」の二字を揮毫しておられます。

お帰りの際、ぜひ一度、大きなおしやもじとすりこ木をごらん願います。そして「仏心」を心のみやげとしてお持ち帰りくださるようお願いいたします。

「右ほとけ 左われと合わす手」を家庭生活に置き換えれば、奥さんは、右の手にご主人の心をいただき、左の手に自分の心をこめる。旦那さんは、右の手に奥さんの心をいただき、左の手に自分の心をこめる。こうしてピツタリ心の波長が合えば夫婦円満の生活となり、それをもってお年寄りや子供さんに相対すれば家庭円満、ひいては社会も明るく住みよいものにな

るのであります。

そしてこれが「平常心これ道」という瑩山禪師さまのみ教えにかなう日送りなのであります。

ちやうど時間ですので、これで終わります。お気をつけてお帰りくださるようお願いいたします。



三松閣落慶記念
本山参拝





三松閣大講堂で参拝の心得を拝聴する



齋堂で「五観の偈」を唱える



輪辋子をいただく



大祖堂で供養調経



夕陽を受け静かに境内に佇むと
25年前の僧堂生活が思い出される

善光寺だより

善光寺住職四男黒田賢志得度式

八月二十四日、善光寺住職黒田武志四男賢志君の得度式が、釈迦殿において行われた。

佐藤俊明老師から次のような得度の祝偈をい
たがいた。



賀賢志君之得度

掌中ノ珠磨イテ十一年

賢志染衣シテ大聖ト宣ス

男四悉皆為ニ佛子ト

善光寺畔放レ光ヲ鮮ナリ

善光寺六地藏開眼法要行わる

善光寺住職永年の念願であった石造りの六地藏開眼法要が九月二十一日、佐藤俊明老師を導師に迎えて行われた。法要のあと萩原玄明老師の講演があり、靈能力の話など大変好評であった。

萩原老師は真言宗醍醐寺派長江寺福浄院住職で、『死者は生きている』の作者として知られている。



講演中の萩原老師



善光寺六地藏開眼香語

代受願深地藏尊

代受の願いは深し
地藏尊

六道能化尽乾坤

六道を能化して
乾坤を尽す

尊願仰觀如圓月

尊顔を仰ぎ觀れば
圓かなる月の如し

正是善光大悲門

正に是れ善光
大悲の門

善光寺文化講演会



十一月二十五日(日)
午後二時より、激動する世界を旅して」と題して、伊藤博先生が講演された。伊藤先生はニューヨーク州立大学教授で当山育英会顧問です。昨年三月から九月まで十六カ月を訪問して感じた世界の情勢をお話して下さいました。次号に伊藤先生の原稿を掲載いたします。乞ご期待!!

海外留学僧派遣育英会が総会

善光寺海外留学僧派遣育英会(黒田武志理事長||善光寺住職)は第五回総会を十月二十日正午から、事務局のある横浜市港南区日野町一六〇四の曹洞宗善光寺で開催し、行事計画として、海外留学僧の論文集の出版や、新しく顧問に曹洞宗の大本山総持寺元監院で北海道釧路市定光寺住職・大道晃仙氏と東京・駒込吉祥寺住職岩本昭典氏を加え、留学僧のうち大学の教授・助教授クラスを同育英会の講師とすることなどを決めた。総会后、同育英会の参与である写真家の駒澤晃氏が出版した『一隅を照らす玲瓏の人々』(日本教文社刊)の出版祝賀会も催された。本堂で黒田理事長の導師により法要が営まれた後、総会に入った。宮本延雄理事(鶴見大学歯学部事務部長)、黒田理事長の挨拶に続いて、佐藤俊明常務理事(曹洞宗龍光寺住職)が「わ

ずか六年間に世界八ヶ国に二十九人の留学僧を送り、それぞれの国で研鑽いただいていることは意義深い。物事を継続していくことは大変難しいことだ。これからは育英会内部で新しい動きをしなければならぬ時だろう」と話した。

来賓として、曹洞宗神奈川県第二宗務所第五教区の岩波道俊教区長（横浜市戸塚区・福泉寺住職）が「私の弟子もアメリカへ出させていただき、感激している。毎年の教区報告の第一番に当山のことを書かせていただいている」と挨拶。新美昌道事務局長を議長に選んで議事を進めた。

はじめに桐元大智事務局長が昨年度の行事を報告。続いて黒田理事長が今年度の行事計画について説明し、①留学僧の論文集を中外日報社から出したい②台湾、カンボジア、ベトナムへ取材旅行を実施したい③顧問に大道晃仙定光寺住職と岩本昭典吉祥寺住職を推選したい——と

提案、いずれも満場一致で承認された。

台湾取材は今年十二月十一日から十四日まで、黒田理事長、佐藤常務理事、阿部慈園参与



(東方学院講師)、駒澤参与の四人で実施し、善光寺の末寺である福寿院の姉妹寺を訪問する計画。平成三年度の行事予定は、一月に第七回留学僧を発表、二月に機関誌『成寿』第十六号を発売、三月にカンボジア・アンコールワット取材、論文集発売となっている。

このあと、留学僧十人が近況報告と抱負を交えて自己紹介。海外から日本への留学僧もおり、それぞれが海外留学を自己の貴重な体験としてどう生きるかを考えて実践していることを報告した。

また、緊急動議として、留学僧の中で大学の教授・助教授の職責をもつ者を同育英会の講師とするよう規約変更が黒田理事長から提案され、これを承認。該当者として第四回生の星宮智光氏(叡山学院教授)、第五回生の引田弘氏(愛知学院大学助教授)、第六回生の森祖道氏(城西大学教授・東京大学講師)が講師に就任するこ

とになった。

この後、森祖道氏が、スリランカ国立ケラニア大学パーリ学仏教大学院に新設された日本仏教に関する研究教育講座を担当する初代客員教授として招聘された体験をもとに、約二十分記念講演した。

涙と笑いで激励 駒澤晃氏の出版祝賀会

育英会の総会に引き続き続いて駒澤晃氏の新著『一隅を照らす玲瓏の人々』の出版祝賀会が善光寺海外留学僧派遣育英会の主催により開催された。

これは、駒澤氏が同育英会の参与として『成寿』のグラビア写真を担当し、黒田理事長とは親しい間柄であることや、また、日本の各所で一途に仕事をしている人たちを紹介した同書の最初に黒田理事長が取り上げられていることなどから、黒田理事長が発起人となったもの。

集まったのは、駒澤氏が著書の中で紹介した人たちや、有縁の人、駒澤氏を慕う人たち。本堂で法要の後、黒田理事長が「御縁により育英会で祝賀会を開かせていただいた。聞けば先生の十一冊目の本だ。その冒頭に恥をかかせていただいたようなことだ」と挨拶して始まった。

席上、佐藤常務理事は、写真家としての駒澤氏の活躍とともに、その人柄を讃えて次のように祝辞を贈った。

「先生は令名高い写真家で、文芸春秋や朝日新聞等で優れた写真を発表されている。それにもまして有り難いことは、奥様と共に、ライフワークとして画像写真と取り組まれていることだ。豪華な写真集も出されており、私どもは足を運ばずに三世の諸仏にお逢いできる法悦を味わわせていただいている。

一億総評論家の時代と言われ、人の隠している所を暴き出すのが優れた評論と見られている

が、人の善意善行をありのままに紹介して下さることが大変嬉しい。先生は、自然光で写真を撮られる。そのように、人の自然な玲瓏の姿を書いておられる。道元禅師のお言葉にあるように、むさぼりも、へつらいも無い、すつきりとした本として感銘深く読ませていただいた。

もう一つ、行間にほのかに玲瓏の人が浮かんでくる。それが妻という名で出てくる奥様だと思ふ。写真家の大変な仕事を支える奥様があつて、初めて駒澤先生があると思ひ、奥様にも祝意を表したい」

また宮本理事は「三時間ほどで一氣に読ませていただいた。黒田理事長について、まさに心眼でとらえてお書き下さっており、純粋な気持ちにさせられた思ひ。素晴らしい本を世に出され、お祝いと共に感謝申し上げます」と述べた。

駒澤氏が朝日新聞長野支局時代から「心の支え・恩人」として慕う朝日新聞社の富森叡児常

務は、「駒澤君は温厚のように見えて、なかなか頑固者だ。東京に出て苦労をしていると思う。

初心を貫く頑固さ、そして、目立ぬように、ずっと支えてこられた奥さんとの出会いが大きな力になったと思う」と激励を込めて祝いの言葉を贈った。

日本教文社の永井光延第二編集部長の発声で乾杯し、駒澤夫妻に花束が贈呈された。駒澤氏は「朝日新聞あつての駒澤だった。朝日を出て、たくさんの人々のお世話になって今日の私がある。ただ皆様のお力をいただき、今まで生かせていただいている」と謙虚に謝辞を述べ、著者の中で紹介した人々、この日参加した友人、知人を一人ずつ紹介し、また逆に一言ずつ参会者から心のこもった言葉を受けて、涙あり笑いありのうちに散会となった。

第七回海外留学僧採用者決定

善光寺海外留学僧派遣育英会（黒田武志理事長、事務局〓横浜市港南区日野町一六〇四・曹洞宗善光寺内）は、このほど第七回留学生として五人を採用し、二人を継続採用することを決定した。辞令伝達式は二月五日に善光寺で行なわれた。同会が昭和六十年から採用してきた育英生は、これで九ヶ国に三十四人にのぼる。

新しく採用された育英生は、落合隆（曹洞宗で得度）、品田裕淳（真言宗豊山派僧侶）、早川敦（東北大学大学院博士課程）、曹良淑（立正大学大学院修士課程〓韓国曹溪宗）、李煥秀（東洋大学文学部印度哲学科〓韓国曹溪宗）の五氏。継続採用者は、曹洞宗の沖田玉映、東京大学大学院生の金秀娥（韓国曹溪宗）の二氏。

落合氏は社会人として生活する中で発心し、善光寺の黒田住職に就いて得度。タイの僧伽に

身を投じて上座部仏教の修行をし、僧侶としての道を歩む決意で留学僧に応募した。四十歳。推薦人は駒沢大学の鈴木格禪教授。

品田氏は大正大学仏教学部に入学する時、将来、僧侶になることを夢みて仏門に入った。その頃から、タイの僧院生活を経験したいと希望しており、応募。現在は豊山派・普賢院の徒弟。推薦人は青森県の曹洞宗常現寺住職高山元延師。二十四歳。

早川氏は東北大学文学部を卒業後、同大学院文学部博士課程前期二年の課程に入り、印度学仏教史学を専攻。サンスクリットを中心とした語学の修得とインド文化史の研究を志して東洋学研究所の伝統があるオランダへの留学を希望、塚本啓祥教授の推薦を受けて申請した。二十五歳。

曹氏は韓国・ソウルの中央僧伽大学を卒業して来日し、身延短期大学卒業後、立正大学に編

入。現在、同大学院文学研究科仏教学専攻修士課程で勉学中の尼僧。同大学仏教学部長の三友健容教授の推薦を得て、日本留学の育英生として応募した。四十二歳。

李氏は曹溪宗の通度寺で修行し、日本の東洋大学文学部印度哲学科に入学。同大学の金岡秀友教授に就いて密教を学んでいる。金岡教授の推薦を受けて申請した。二十九歳。

沖田氏はアメリカのロサンゼルス禅センターに留学中の曹洞宗の尼僧。金氏は東京大学で、とくに如来蔵の研究を進める韓国曹溪宗の尼僧。いずれも第六回留学生で、今回、給費の継続を申請したもの。

ご寄付御礼

〈海外留学僧派遣育英会〉

トヨコ
コーポレーション 殿 百万円
鈴木 孝一殿 五十万円
細井 勉殿 三十万円
北尾 武殿 三十万円
鈴木 紀元殿 三十万円
安藤 康哉殿 二十万円
阿部 慈園殿 二十万円
井高 帰山殿 二十万円
越石 商店殿 二十万円
金田 親男殿 十万円
成田 大航殿 十万円
増山 静江殿 十万円
宮林 昭彦殿 十万円
瀬之間政勝殿 十万円
瀧澤 武雄殿 六万円
山下 玄道殿 五万円
馬場 道男殿 五万円

須田 道輝殿 五万円
志村 新殿 四万円
小川 光生殿 三万円
渡辺 令一殿 三万円
小松 スエ殿 三万円
岩波 道俊殿 三万円
宮本 延雄殿 三万円
中村 正信殿 三万円
鈴木 たか殿 二万円
志村 新殿 二万円
黒河内貞子殿 一万円
安藤 和殿 一万円
四居 和子殿 一万円
甲斐 筈子殿 一万円
太田 好信殿 一万円
伊藤 幹雄殿 一万円
井上 葉智殿 五千円
越前 竹子殿 五千円
山下 玄道殿 五万円

関口 徑嗣殿 五万円
島田喜久子殿 三万円
平野 国俊殿 三万円
阿部 慈園殿 三万円
桑山 信晃殿 二万円
吉原木工所殿 一万円
円光 寺殿 二万円
黒田 輝三殿 一万円
伴 鉄牛殿 一万円
上村 勇雄殿 一万円
内山 款偉殿 一万円
潮音 寺殿 一万円
石川 孝禅殿 一万円
落合 隆殿 五千円
龍福 寺殿 三千円
村上 博中殿 三千円

「海外留学僧派遣育英会」ごな
らびに「成寿」に、上記の方々
よりご寄付をいただきました。心から
お礼申し上げます。

読者からのお便り

『成寿』第一五号、駒澤晃氏の御高著『一隅を照らす玲瓏の人々』御恵送いただき、たしかに拝受いたしました。厚く御礼申し上げます。両書とも一気呵成に読了いたしました。成寿誌は韓国仏教の現状の特集、はじめに教えられたことも多く、ありがとうございました。日韓友好に大兄は実践的につとめておられるわけです。学問的交流プラス大兄のような実践的交流が、是非とも必要です。(後略)

三鷹市 東 隆真

「韓国ふれあいの旅」のカラーや「巻頭言」とカラーを嬉しく拝見いたし、海印寺の朝課などに参加した二〇年前を懐しく思い出しました。

「韓国仏教との出会い」を拝読し現在、立派になった韓国仏教の姿に感

激いたしました。もっともっと韓国仏教の寺院や仏塔や遺跡の調査をしなければと思いつながら、多忙な日々を送っております。

東京都 鎌田 茂雄

『成寿』秋季号御恵送賜りありがとうございます。いつもすばらしい文章・写真を拝見させていただき自分自身、きゅつとさせられます。禅の国際化について先人の皆様が目的達成されなかったことを、今開化している姿まさに黒田老師は、「智目行足以て清涼池に到る」日本の元祖です。

時節柄御自愛して下ださることを祈念申し上げます。

東京都葛飾区 林 博明

毎々すばらしい『成寿』御送り頂き時限の隔たりに戸惑っています。

韓国仏教との交流その他諸外国との融和に日夜東奔西走の御活躍に言葉

もなく敬服するのみです。

韓国には昭和六年当時、ソウル、昔の京城時代、永平寺別院曹溪寺や博文寺に二、三年安居した事がありますが、韓国寺院と直接交流は全く未経験でここでも時限の相違を感じました。

世界は今第三次世界大戦に巻き込まれようとしています。又、一般社会では強盗殺人、老後問題その他あらゆる公害問題は、地球破壊に拍車をかけております。諸外国にも日本にもすばらしい文化遺産があり、人類永遠の子孫のためにもあらゆる文化を護るためにも、戦争を起こしてはなりません。今こそ仏教徒特に禅を知る我々の使命として、お釈迦さまの拈華微笑は平和への原子爆弾を投下しなければならぬ時として、焦眉の急務に心急いでおります。先ずは御無沙汰お詫びまで。

富士宮市 本宮 宗顕

『成寿』第一五号お届け下さり、ありがとうございます。韓国仏教は日本のようにセクト化しておらず、また若い方々はよく学問しており、ですので、これから発展するだろうと思います。方丈様をはじめ御山内様の御健勝を祈念いたし、御礼いたします。

東京都世田谷区 吉津 宜英

お元気で充実した御活動の御様子、敬服致します。韓国仏教の一端を拝読し、いづれ訪ねたい思っています。

文芸春秋のグラビアで「玉瑛さん」の写真を見ましてホッと致しました。山口県下の授戒会で直壇を務め、その折二度位戒頭をお願いしました。

ご健勝を念じ上げます。

山口県 荒木 茂樹

何時も御精進のこと、お喜び申し上げます。お心にかけていただき有り難うございました。

思っているもなかなか実行の出来ないことを実行なさいます。海外との交流、派遣僧等々頭の下がるお仕事を続けのこと、有り難く読ませていただいております。私も精一杯自分に与えられた仕事をいたします。有り難うございました。

東京都 真龍庵 津龍

この度の秋季号は韓国仏教の特集で嬉しく、早速よませて頂きました。鎌田先生のお話の中に出て参ります金知見先生に、七年前お招きを受けて参りました時のことがまざまざと思い出され、とてもなつかしく拝見致しました。

大正大学の学長で先年亡くなられました安居香山先生のお誘いで、日韓仏教交流協会に入りましてからは60、62、64と一年置きに韓国へ行っております。早稲田の仏教青年会の会長を主人がしておりますときは金知見、蔡印幻両先生のお陰で、日

韓仏教学生会議も致しまして、韓国とは種々御縁がございます。先生は桜の美しい時に行かれ、本当によろしゅうございました。

どうぞくれぐれも御法体お大切に遊ばされて下さいませ。

東京都文京区 島田喜久子

『成寿』ありがたく拝見いたしました。いろいろと国際的国内的に仏教のため御尽力下さいますことをありがたく感謝しております。ますます御精進の程お祈り申し上げます。

鎌倉市 藤吉 慈海

成寿は海外留学僧とともに充実しているという思いを新たにしました。今は「平和がいい」と思っているだけでは、どうしようもない時代です。行動の時代です。分り易いところではイラクへ人質を救いに行つた猪木議員の行動です。もっと大切なのは「平凡な奥さん達が行動したこ

と」です。大切な夫の「生命」を救うために普通の奥さんたちが行動したことです。世界の修羅場にのりこんでいった行動が、現代において何をなすべきかを象徴しております。

そう考えるとき、海外留学僧制度という行動が二十一世紀を明るくするすばらしい事業であり、お釈迦さまが現代に生きていらっしやったら必ずや同じ行動をされたと思います。

また、毎食の一口を献じれば誰でもこの行動、一大事業に参加できるといふのが、この制度のすぐれたところですよ。

毎食時にちよつとでも海外留学僧制度のことを思いだせば、食事ごとに米、肉、魚、野菜の生命をいただいて生かされていることへの感謝に合掌します。どんな偉大な行動も毎食時の合掌という一歩からはじまります。

当面の目標として百人の留学僧を目ざしましょう。「毎食時の一口を献

じる」を食事毎に思いだして生きていけば、遠い目標ではないと信じます。

横浜市 赤間 義徳

黒田老師のますますのご活躍正に目をみはるばかりでございます。老師のように先導の鈴をならして下さる方がおられることは日常雑事に追われ、ややもすれば横道に入り勝な我等に大いなる、希望と勇気を与えて下さいます。まことにありがたい事でございます。

どうぞこの仏縁を太い綱としてこれからも御指導下さいますようお願い申し上げます。

東京都中野区 中村 正信

皆様にはお変わりなく御健勝の事と慶びにたえませぬ。

さて、本日育英会の諸資料を惠送賜り誠に有難うございました。会の発展の様子が手にとるようにわかり

ます。今後の更なる人心開発の思いを新にする思いです。

京都市 島崎 義孝

御老師の益々の御活躍を「成寿」を拝読させて頂き陰ながらお慶び申し上げております。御老師の独自の奨学事業と国際交流の展開には眼を見張るばかりで、常々尊敬致しております。

私は今「氣練」を含む「武心道」という新しい格技の普及に取組んでいます。将来は青少年はもとより、成壮年の婦人にも参加できる道場を開設し「静」の坐禅に共存しうる「動」の氣練を一つの心の修養の場として広めたいと願っております。是非御支援の程よろしくお願い申し上げます。

菊地 英昭

いつも心暖まるお心に頭が下がります。又「成寿」のありがたさをか

みしめております。度々の御通信にも御返信もせず申し訳ございません。未だに入、退院をくり返しておりますが、入院の時は必ず成寿を持って同室の皆様にも読んだり貸したりして話合っております。

ほんとにお礼が遅れて申し訳ございませんでした。厚く御礼申し上げます。益々御発展をお祈り致します。

横浜市 福田きく代

韓国の写真はいつもより美しく写っています。落着いた中に信仰の心があふれていて、怠け者の私には身のひきしまる思いです。

三喜庵の筆にかかる仏像の巧みさに、頭をたれます。たまに、まねて画いてみております。

静岡県 岩谷 朝吉

毎回『成寿』をお贈り下さいます。深く感謝申し上げます。深くおにも拘らず御無韻の御無礼、深くお

詫び申し上げます。私の師、三喜庵先生のさしえも、とても楽しみにしております。又、海外留学僧の並々ならぬお仕事に光栄あれとつつしんでお祈り申し上げます。

横浜市 和田 雅子

前略御免下さい。去る十月七日には初澤家墓所開眼並に故誠藏の納骨の為遠方まで御運び頂きまして、誠に有難う存じました。懸案の墓所に無事祀る事が出来、仏も満足してくれたのではないかと存じます。今後いつまでも仏を守り供養する事が残された者の責務と心得ております。今後ともよろしく願ひ申し上げます。

横浜市 初澤きみ子

方丈様、お元気でございすか。京都の興聖寺から帰りました。短い三日間でしたが、本当に有益な毎日でした。心から御礼を申し上げます。

前角老師様にもお目にかかって嬉しかったです。欧米人の仏法を学ぼうとする涙ぐましい姿を見て来て、私自身に大変な警策になっております。いい経験を見せて下さいました。お体をお大切に。

東京都世田谷区 陳 永裕



第八回海外留学僧募集について

目的

大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先 世界 各地

派遣期間 一年間とするも場合により延長するも可

給 費 派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員 2〜3名

提出書類

(1) 論文

(3) 卒業証明書

(5) 推薦書

(2) 保証人と連署した願書

(4) 履歴書

(6) 健康診断書

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割

● 二一世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと

● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五〜一〇枚

原稿〆切 平成三年十二月十日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

Let Us Be Considerate for the 21st Century

The last year was memorably significant for us Soto-shu. It fell on a centennial of the publication of the “Shushogi” which you must be familiar with through your reading and chanting from time to time. Since last spring, therefore, many celebrations were held in many parts of the country, the greatest and the final of which took place at Makuhari Messe on October 27.

The celebrations are certainly gratifying, but we must not leave them to end in mere events. Every one of us in the priesthood of the Buddhist sect must be keenly aware of how to propagate and realize the teachings of Shushogi.

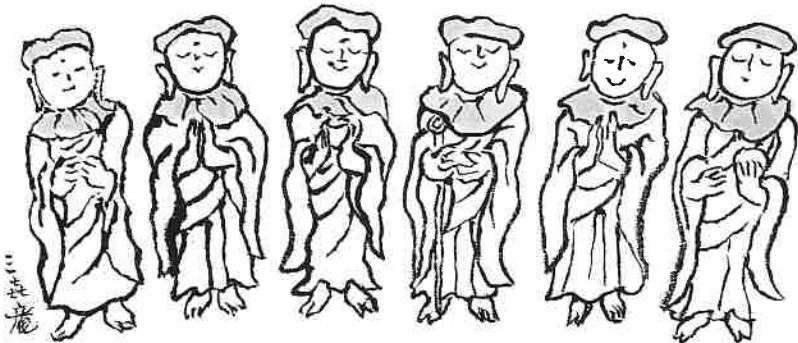
In the year of the memorable centennial, and from such a viewpoint, the Zenkoji Scholarship Society for Priestly Study Abroad decided to make attempts to deepen friendly relations with neighbouring countries with whom Japan has had close and friendly relations. As the first step, we visited Korea in April, as reported in the previous issue, and discussed with Dr.D.

Taeg—Su Chae, a protagonist in the Korean Buddhist society, about the interchange of priests for study between Japan and Korea. In December, we visited Taiwan, where we visited Kiyomizugan Temple in Changhua Prefecture which is a sister temple of Fukujuin at Hakone Yumoto Kannon, a branch of Zenkoji, and held a Buddhist service for the dead jointly with Taiwanese priests; and we then visited National Taiwan University and arranged to have Professor Yo Agetsu, philosophy, as our consultant. To take the opportunity of our visit, Professor Yo had arranged to hold a lecture meeting, at which our councilor Abe delivered a lecture on primitive Buddhism, and then Rev. Sato, Managing Director, gave an address under the title of “At the Centennial of the Publication of Shoshugi”, in which he emphasized that the teachings of the great Zen priest Dogen are the very guides for us to survive into the 21st century. Rev. Sato concluded his speech with a touching episode of his own experiences with a Chinese who treated him with considerate care and affection during the War. The

episode moved the audience immensely.

At the National Taiwan University, the University staff including the President Shen Sun warmly welcomed us, showed their deep appreciation of the projects of our Scholarship Society active for the contribution to the peace and progress of the world through the development of Buddhism, and promised to support us.

We ask you, every one of the supporters of the Temple, to keep helping us promote the operations of this significant Scholarship Society for Priestly Study Abroad.



編集後記

▼平成三年、春季号をお送りいたします。懸念されていた湾岸戦争が起こり、毎日伝えられるニュースに心が痛みます。一日も早く終結に向かうよう念じてやみません。

▼昨年十二月に理事長、佐藤俊明常任理事、阿部慈園・駒澤晃両参与の計四名で台湾を訪問しました。清水岩寺での大歓迎、台湾大学では総長先生はじめ皆様にあたたかく迎えられ、有り難く、あつくお礼申し上げます。

▼台湾大学での佐藤老師の講演は本誌でもご紹介いたしました。昨年がちょうど「修証義公布百周年」にあたり、二十一世紀に向けてます

す『修証義』の教えが高く仰がれることを述べられました。私たちも日々のお勤めの中で、心して読誦して参りたいと思います。

▼第七回海外留学僧が決定し、二月五日、辞令伝達式が行われました。育英会では今回をもって9カ国に34名の留学僧を派遣することができました。皆様のご支援を感謝いたします。次回の本誌で採用者の論文を掲載する予定です。

▼二月五日開山・黒田白純大和尚の十三回忌法要を執り行いました。導師は吉祥寺住職岩本昭典老師。

▼四月、アメリカ・ロサンゼルス禅センターの前角老師ほか八名が善光寺に来山の予定です。仏法の奥義をきわめようとひたすら励む姿に、日

本人も外国人もありません。親しく交流を深めていくことは、これからますます必要なことなのです。

▼五月にカンボジアのアンコール・ワットとインドネシアのボロブドールの取材を予定しています。どちらも貴重なアジアの文化遺産で、その早急な保存修復が待たれています。自分の目で見てそのご報告をしたいと思います。

▼間もなく春彼岸です。ご先祖様のお参りをいたしましょう。

成寿 第十六号

平成三年二月二〇日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五(八四五)一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺